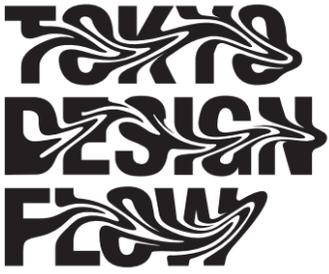




SURFING & FARMING

Surfing. Connected to wave. Playing with surface of the earth.



現在、世界では金融不況、地球温暖化、人口爆発、食料危機などが起き、それに伴い経済の潮目も変わったといわれています。

これらは産業革命以降、経済を拡大し消費することが発展の原動力とされるなか、エネルギーを無限に使ってきたことに対する当然の帰結です。消費エネルギーを抑え、文化のエネルギーと創造の力で世界を変え、人々の生活を考える、本当の人類の英知が必要な時期が来たといえます。

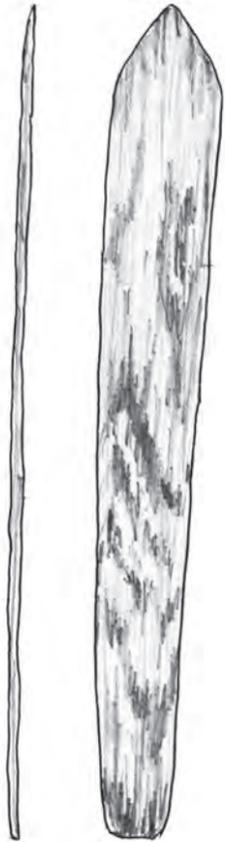
TOKYO DESIGN FLOWはこのような問題意識のもと、都市の状況や人々のライフスタイルそのものをデザインの対象としてとらえ、それら全てのデザインを覆う傘となり、大きな流れを創り出す運動体となることを目指します。

TOKYO DESIGN FLOWは一つの事象を表すものではありません。

東京を中心にデザインを取り巻く状況を、マンスリーイベント「LAST THURSDAY」をはじめとするリアルイベント、ウェブサイト、紙媒体などを通し情報を発信していきます。

Design & philosophy

Surfing and Farming



キャプテンクックがニュージーランドとオーストラリアを発見し、そのままハワイに向った19世紀半ば、ミクロネシアの島々とハワイの海の水面(surface)に浮かんでいる板に乗った人間を発見した。それ以来この板に乗った波乗りという遊びを Surfing—水面を遊ぶこと、として帰路のオーストラリアに伝えた。

1968年には膝を立てショートボードに乗る Knee board を発展させたショートボードを新しいサーフィンの発明としてアメリカ人でオーストラリアに移り住んだジョージ・グリノーが始めた。このサーフボードの革命は当時パリの5月革命や日本の全共闘運動、アメリカのヒッピーの革命などと繋がった今までのサーフィンの概念を大きく変えるものであった。そして忘れてはいけないのは、実はこの年 1968年に California ではインターネットの元になるコンピュータの双方向端子としての情報への転用の使い方が始まったことである。それと時を同じくして NYのクラブでは DJが始まった。このように世界の文化と情報は流れるように地球の表面(サーフェス)を伝播するようになった。

さらにこの海と共に生きる人々(サーファー)は、地球と共に生きるパーマカルチャーとしての農業を作り上げた。これらの元になるのは自然と共に生きて行くという、東洋的自然観であった。

こうして本来サーフィン文化は農業と近く、文化は農業のように知的耕作であった。僕らはここに気がついて、これから水と太陽と地球をもっと大切にして、都市の文化を考えていこうと思う。



アロハー！最近どう？暑いねー、しかし。もう僕なんか6月の末から夏モードだよ、マジ常にハーフパンツ。そんなことはさておき、今月号のテーマはずばり、「SURFING & FARMING」ってことで、僕のサーフィンにまつわる話、聞きたい？いや、じつは僕、中学の頃鎌倉に住んでいて(これマジ)、由比ヶ浜だったわけ。中学3年のころなんか、友達みんな朝サーフィンしてから学校来て、帰りは学校から波見てあったらサーフィン行っちゃうのよ。これはカッコいいライフスタイルだなあ、と思ってたわけ。今回の号でも単なる行為としてのサーフィンや農業ではなく、生き方、ライフスタイルとしてのそれらを切り取っていくつもりだよ。……ん？サーフィン？僕？……僕は、サーフィンはほら、その……したことは……ないけども、しようかなとはずっと思ってるよ……え？彼氏がサーファー！？あ、そうなんだ……それ、いい感じだね。教えてくれる！？……いや、とりあえず、大丈夫です。

MAT.



SURFING & FARMING

SURFING & FARMING

Surfingは“surface”（水面、地球の表面）をなでるように遊ぶもの。

Agricultureは“agri”（ラテン語でfieldの意）を“cultivate”（耕す）ことから始まり、

“culture”へと繋がった。1968年以降のショートボード革命によって、より3次元的に自由な感覚を手に入れたサーフィンは、「ネットサーフィン」という言葉としても使われ、現代のネットカルチャーへとつながっている。

古代からある文化“culture”は“cultivate”に由来し、連続してつながっている。

水面と戯れるサーフィンと土地を耕す農業は、地球の水面と大地に対する働きかけ、関わり方という点で共通する。

今、サーフィンや農業に人々の目が向くのは、環境への関心が高まるなかでは必然のことだろう。

しかし、単純な自然回帰としてだけでは現代のサーフィンや農業は捉えきれない。都市生活にも農的感覚は根付き始めている。

都市に生き、自然とも共にある。別離したものではなく地球を、社会を3次元的に捉え、行動する。

そうした“SURFING” & “FARMING”の感覚が今必要だ。



Silas Hickey interview

Things around SURFINGということで、サーファーとしてオーストラリアで過去4位の成績ももっている、デザイナー／プロデューサー／映像作家のサイラス・ヒッキー氏にインタビューを敢行。

マーク・ニューソンのニッケルサーフボードや1968年の革命のことなどいろいろと聞いてきました。

interview: 黒崎輝男 text: MAT. (Media Surf)

黒崎輝男 (以下、K)：サーフィンは単なるスポーツじゃないよね。もっと、ライフスタイルとかカルチャーに近いと思う。

Silas Hickey (以下、S)：そうだよ！1968！サーフィンにとって最も重要な年が1968年だったと思う。そこで、ショートボードが生まれたり、ダブルフィンになっ

たり。結果、それまでの波の上での動きと全く異なる、新しい三次元の動きが可能になった。この年から全てが始まった。これ以降は、なんかプロテニスみたいになっちゃったんだ。大会だとか成績とかね。シェイパーがシェイプして、それに乗ることで波と一体になる。大会や成績な

んかそんなもの関係ないんだ。最近はそのルーツに戻ってきていると思うけれど。サーフィンは他のどのスポーツとも違う。カルチャーがあるんだ。サーフミュージックはあるけど、テニスミュージックやゴルフミュージックなんて言葉聞かないだろ？ライフスタイルなんだ。

K: 1968年は後に世界に大きな影響を与えることになる、バリ五月革命もあつたり、革命の年だね。話は変わるけども、Joe Larkin (伝説的なサーフボードシェイパー)に会ったの覚えている？

S: 彼はファンタスティックで最も重要なシェイパーだよ。誰もサーフボードのシェイプなんて気にしない。みんなサーフカルチャーにうまくのっかって、何か作って金儲けしたいだけさ。ばからしいよ。でも、Joeは違う。彼自身がカルチャーだし、彼の仲間たちがひとつの文化を作り上げたんだ。彼のサーフボードなしでは、サーフィン産業なんて成立してなかっただろうし。

K: そういうサーフアパレルブランドの創設者たちにも会ったね。

S: ああ。でもああいう人たちに共通して言えるのは、みんなつまらないってことだよ。本気でね。これ (サイラス氏所有のJoe Larkinが作ったサーフボードを指差し

ながら)がなければ、これ(着ているTシャツを指差しながら)は存在しないんだぜ。

K: でも彼らは成功した。仲間と毎日サーフィンに明け暮れていた彼らが。

S: 確かにね。でも、そういったブランドたちはサーフィンそのものの発展には何も還元してないよ。たぶん、サーフボードの進化という点で還元をした唯一の人間はマーク(・ニューソン)くらいじゃないかな。彼が初めて、新たな可能性を求め、いままでと異なる素材でサーフボードの限界に挑戦したと思う。

K: そうかもね。

S: そういったブランドたちはサーフボードデザインのさらなる可能性を引き出そうと、リサーチだとかにお金を使ったりしてないと思う。単にTシャツを作ってるだけだよ。

K: 確かに。サーフィンしてて、ナチュラルハイになったりとかするの？オーガニックフード食べて、体の組織も変わってくわけでしょ。

S: サーフィンすることで、確かにかなりアドレナリンはでるよ。僕はほとんどオーガニックフードは食べないけどもね。

K: サーファー特有のスラッグみたいなものもあるよね。歌みたいに喋るしね。



SURFING & FARMING



S: サーフィン用語って言うよりも、サーファーが使う言葉だね。興味深くて、他のスポーツでは見られないことだね。まあ、僕が知っているほとんどのサーファーは僕よりもロックだし、僕よりも頭が悪い。歩くサーフィン用語辞典みたいなものさ。彼らを使う言葉はとて面白い。今、パッと出てこないけども！僕は人生の半分を面白いサーフィン用語を考えるのに捧げたよ。
K: サーフィンは社会とは違ったところにあるというか、それだけで、成り立つ宇宙という感じがな。

S: 確かにね。誰もなんで今のシェイプが他のに比べて、いいかなってわからないんだよ。どういう仕組みなのかとかね。あまりセンチメンタルになりたくないけども、サーフィンは本当にすばらしいものだよ。サーフィンは一つの思想で、生き方。大抵の場合において、サーフィカルチャーを愛するヒトは、地に足着いたいいやつが多い。

K: 話は変わるけど、マーク・ニューソンがサーフボードのシェイプを新たなレベルへと引き上げた？

S: その話に関しては、スパイラルで黒崎と僕ら共したエキジビションがすばらしかったんだと思う。あれは、初めてサーフボードがギャラリーでの展示という文脈上で展開されたものでしょ。そしてその後、彼がメタルのサーフボードをデザイン/制作したのは、サーフボードのシェイプというものにたくさんの注目を集めさせたね。そういえば、あのエキジビションの後マークと食事に行ったんだよね。あそこから全てが始まった。

K: うん。皆でしゃべったり、エキジビションから、彼インスピレーション湧いたんだよね。

S: 単なるデザインでなく、しっかりと機能するものを彼は作りたがっていた。

K: サーフィンの未来はどうなると思う？

S: マークか誰かが新しい素材やテクノロジーでサーフボードの未来を切り開いてほしい。こういったことができるのは、新たな素材やテクノロジーの追求を止めない人だけだろうから。Tシャツを作ることじゃないんだよ。やっぱりサーフボードのシェイプなんだ。そのサーフボードにのることが全ての土台なんだからさ。それが一番重要。誰かがそのうち言うよ、「第二次世界大戦の時の方法でサーフボードつくるのやめようぜ！完璧なサーフボードのための完璧な素材でやろう！」ってさ。



Silas Hickey
東京を拠点に、デザイン・映像の双方を手がけるプロデューサー / 映像作家。国内外のクライアント Virgin, Polygram, Tower Records, MTV, Discovery channel and AOL/Time Warnerと各メディアをベースに多様な活動を展開している。

Teruo Kurosaki
1970年代より世界中を旅行して、アンティーク、ビンテージ家具輸入からデザインの世界に入り、1984年より、マリー・クリスティーン・ドロネー、フィリップ・スタルク、セルジュ・ムユ、マーク・ニューソン、倉俣史郎、ロス・メネスなど世界中の新しいデザイナーにデザインを依頼しオリジナル家具を製造する「IDÉE」を設立。その後創造的都市論や情報に興味を持ち「東京デザイナーズブロック(TDB)」を始める。建築物の再生の R-Projectを立ち上げ、廃校になった池尻中学校を「IID 世田谷ものづくり学校」として再生。「Schooling-Pad」や「流石創造集団」を設立し、家具、空間、デザインと建築、情報と都市を巡り独自の視点での活動を行っている。



"Surfing, unlike any other sport really has its own culture."

K: Surfing is not just a sports, it's more like a lifestyle, culture.

S: Right...1968! The most important year in terms of Surfing. The Short board was born, twin fins and so on. After 1968, surfing turned into something like Tennis. Then way after...just like Fucking pro tennis! Tennis...It's bull shit! But now it is kind of going back to its roots. You shape the thing and that thing connects you to wave. It doesn't have anything to do with competition or anything. Surfing, unlike any other sport really has its own culture. There's no such thing as tennis music or golf music, but

there's surfing music. Surfing has a proper culture!

K: 1968 is the year of revolution. By the way, do you remember the shaper Joe Larkin?

S: Joe Larkin is a fantastic shaper. He is the most important shaper perhaps in the world. But no one gives up f*** about surfboards. Everyone gives a f*** about making stuff on the back of Surfing culture. It's ridiculous. He is the culture. Those guys created a culture, the billion dollar surfing industry wouldn't exist without the humble surfboard.

K: We met all the people founded

surfing clothing brands.

S: Yeah, and you know, one thing those guys have in common is that they are all really f***ing boring. Seriously. Without that (pointing at surfboard shaped by Joe Larkin), there's no that (pointing at T-shirts.)

K: But they made big money though. They were just surfers. Surfing together at first time.

S: Yeah, they were just surfing, but they made big money (Quiksilver, Billabong, Hurley and so on) and never put anything back. Seriously, the only person I know who actually put some money into developing surfboards is Marc Newson. He is the first person ever really to try and develop new, perhaps better materials.

K: Right.

S: Because these surf clothing tycoons (clothing brands), are not making nor try to push the boundaries in terms of surf board design. They are just making f***ing T-shirts...nothing goes back into research and development as a surfboard.

K: Can you get natural high when you are doing surfing? Eating organic foods and organism changes, right?

S: you can definitely get massive

adrenaline from surfing. Organic foods, I didn't really eat any but it's good!

K: There's a surfing language/slang dictionary, right? The way of talking is like a lyrics.

S: That's the interesting thing about surfing. Unlike any other sports, it's pretty experimental right? Most the surfers I know are like slang dictionaries There are many funny words. So many. I spent my half of f***ing life trying to think up funny silly words.

K: Surfing things are more like out of society. Space kind of feeling.

S: Yeah, No one knows why one shape is better than another. So anyways, you made this crazy f***ing thing, but you don't know why it really works. It connects you to beautiful wave. Nice thing. I try not to get too f***ing sentimental, but it is really nice.

K: The nickel surf board Marc designed pulled up the surf culture to the art level.

S: On that subject, the first surf board exhibition we did was the best. That was the first time surfboards were put into a gallery context right? Then, what Marc did with the metal surfboard brought a lot more attention to the craft of surfboard shaping functionality and design. It



was really good thing. After the Spiral exhibition thing, Marc came and we had a dinner, remember that's where it all started?

K: Yes. We talked and he got an inspiration from the exhibition.

S: He wanted to make a metal surf board which functions really well.

K: What do you think the future of surfing is gonna be?

S: Marc or someone try to make a surfboard with new technology or material. That is gonna be coming from people who are really interested in exploring new technology or material. It's definitely not about making screen printed T-shirts. T-shirts and other things come from the culture that comes from riding surfboards – so its about the surfboard. That is the most important thing. It's gonna be someone who says "let's stop making surfboards with World War 2 boat building shit. Let's make a material that is just for a perfect surf board."



SURFING & FARMING

From the Ancient to the Future

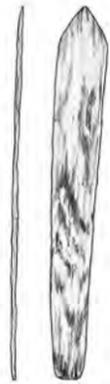
サーフボードがサーフしてきた歴史。

text: 大澤萌子 (Media Surf)

35kgの重い木製のサーフボードに乗ることが想像できますか？それがまさに最初のサーフボードでした。今日、私たちが乗っているサーフボードはいろんな進化を遂げて、今のような形に変わってきたのです。たくさんシェイパーがよりよいサーフボードを目指したくさんの時間を費やして、サイズや重さ、形、フィンや使われている素材まで、様々なサーフボードが様々な波のためにデザインされてきました。

サーファーにとって、サーフボードのデザインはいつでもとても個人的なことであるそうで、そしてシェイパーたちはサーファー自身になりきって形をつくるそうです。プロサーファーとシェイパーはとても近い環境で一緒に働き、それはそれぞれのサーファーの波の乗り方は様々なわけで、サーファーはパフォーマンスをするためにどんなボードが必要なのか誰よりも自分が知っているから。サーフボードのデザインのプロセスはいつもたくさん試みと失敗の繰り返しです。基礎となる形があって、海で試される。そしてフィードバックしてさらに考えられ、それともなっていく。

ただの重い木製の乗り物だったサーフ



Ancient Solid Surfboard

ただの木の板にしか見えないこのサーフボード。このボード、地位の高い人ほど長いものだったらしい。

ボードがマリンスポーツとしてのツールとなった。その歴史をちょっと遡ります。

Solid Surfboards

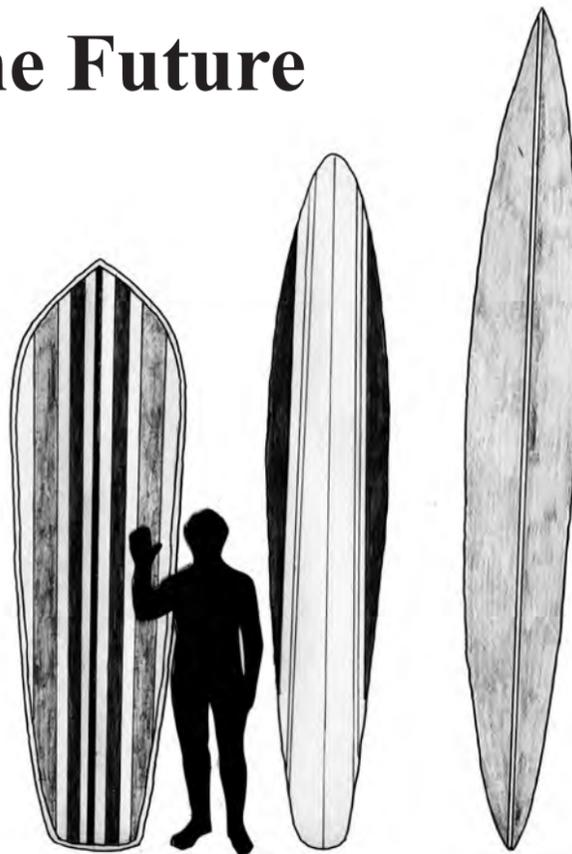
見た目はただの木。古代から使われていて、キャプテンクックが1777年にハワイに訪れた際に発見したとされています。その土地によってサーフボードとして使われた木が違って、たとえばカリフォルニアではREDWOODが使われ、一方ハワイではとにかく大きな木が必要とされていました。この頃のサーフボード(木の板)にはフィンもロッカー(ボードの反りのこと)もなく、たった一回、まっすぐに波に運ばれるだけでした。特に波に乗るルールもなくみんなが同じ波にまっすぐ乗っていたそう。1930年代までこの重いSolid Surfboardsは海に浮いていました。世界で一番古いサーフボードはハワイ、ワイキキのBishop Museumに飾られています。すでに230年も経過したそのボードはハワイのロイヤルが乗っていたそうです。

Hollow Surfboards

古いサーフボードの明確な問題はフィンとロッカーがないこと、そして、何より重い浮力が小さいこと。このHollow Surfboardsは少し軽くなったボードで、新しくplywood やウオーターブルーの接着剤をサーフボードの構造のなかにいれて作られました。これはTom Blakeが1926年に開発したサーフボードであり、さらに彼はナショナルスウィミングチャンピオン、発明家、作家、俳優でもありました。どんな波にも乗れちゃう人。このHollow Surfboardsは20kgにまで軽くなり、乗りやすくなったものの、形は今までもSolid Surfboardsに似ていたためたいしたパフォーマンスはできませんでした。

Rocker

サーフボードの反りのことを指すロッカー。これを最初に発明したのはBob



Hollow Surfboards

その軽さとスピードを生むことから、1931年に最初に大量生産されたボードであった。(左)木製のフレームワークでニスで塗られた。(中)たくさんのスティック状の木がめ込まれて、波にもまれても板が持つ強度が十分になった。(右)成人男性の2倍以上の大きさのボード!

Simmonsだと言われています。さらにモダンサーフボードの父ともよばれる彼はたくさん形の発明を世に発信しました。彼はストレートだったサーフボードにほんのちょっとのカーブを取り入れ、その後のボードのデザインに大きな影響を与えました。その小さな変化が水に浮く大きな違いを生み出したのです。

Fin

サーフボードをコントロールする舵。昔のフィンは1本(シングルフィン)だったが、時代とともに変化していき、フィンは2本(ツインフィン)に。そして今は、3本(トライフィン)のフィンが主流。

Surfboard Leash

リーシュコードとはサーファーの体とサーフボードをつなぐコードのこと。Pat O'

Nellにより1971年に紹介されました。その発明以前はサーファーはサーフボードから落ちてしまったり、泳いでとりに行くしかなかったのです。そして、この発明は安全面でも大事なものでした。ちなみにこのPat O' Nellはウェットスーツを開発したJack O'Nellの息子。

Long board

約2m70cm以上あり、波にゆったりとした感じで乗ることができます。ショートボードのような操作性には欠けませんが、大きなターンが楽にできて、浮力が大きいボードなので、比較的波が小さい日にもサーフィンを楽しめます。初心者はずばりここから。

Hybrid board

ショートボードでもロングボードでもない、いわばその中間に位置するボード。ショ-

トボードよりも早く波に対して立つことができ、ロングボードより動きが軽いのが特徴。最近はこの種類からサーフィンを始める人が増えてきています。

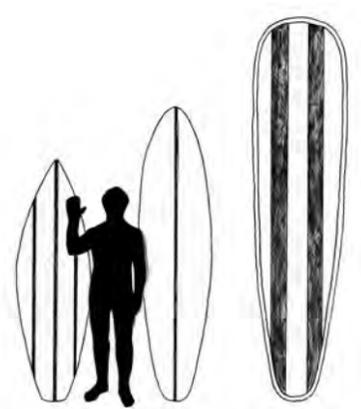
Short board

ノーズが尖っていて、シャープなアウトラインが特徴的なボード。波の上を自由自在にコントロールでき、細かいターンや大きなターン、スピードに乗ったサーフィンができます。

Modern Surfboards

1940年代にファイバーグラスが紹介されたことが、強く、軽く、ウオーターブルーのモダンサーフボードの開発に繋がりました。Balsa Woodというとても軽い木がボードの核心部に使われ、その後Polyurethane foamと呼ばれる現在でも使われる資材に変化していきました。軽いサーフボードはたくさんの方がスポーツとしてサーフィンを楽しめるようになりました。今では1.6mのtwin finから3.6mのもの、もしくはその間のものが主流になっています。もちろんそのほかの様々な素材やテクニクは試されてきたけれど、もっともモダンなサーフボードは基本的に30年前から同じように作られています。

これだけ知っておけば丘サーファーも一歩先行く丘サーファーに!でも、やっぱり海に行かないとダメですよ。



Recent Surfboards

スタイルや用途によって、様々な長さ、形状の板が使われている。(左、short) アグレッシブに波にせめていくならこれ。(中、Hybrid) ショートとロングの真ん中。ファンボードとも呼ばれる。(右、Long) 2.4mから4mのボード。大きな波にゆったりれる。

日本サーフィン伝説

鎌倉のレジェンドサーファー 出川三千男インタビュー

text: 清田直博 (Media Surf)



僕は、僕たちと言ったほうがいいかな。昔、七里ヶ浜には何にもなくて、田舎で。小学生の頃は「フロント」っていうパドルボード(サーフボードに立ってパドルで進む)の原型みたいなもので遊んでね。1964年の東京オリンピックの頃、中学に入って思春期の時にちょうどサーフィンに出会って。放課後、夏休み、土日はほとんど中学校の仲間と海に出た。鎌倉は立川や厚木、横須賀にも近いから、ベースの米兵が長い板を持って鎌倉に来だし

で。その頃は輸入業者もいないから、彼らが持って来るギアがエポックだったね。1ドル360円の時代で彼らの生活力がスゴかった。米兵たちが持って来た雑誌をクシャクシャになるまで見てね。サーフィンの広告写真を見て身長と板の長さの割合を定規で測ったり、答案用紙の裏に板の形を描いたり、そんなことばかりしてましたね。材料も無いから木枠を組んでヨットのような感覚で作ったやつもいたし、見よう見まねで。部活動みたいなノリでやってた。本当に純粋だったね。

サーファー仲間では鎌倉の僕らが一番年下、でも一番ホットで上手かった。鶴沼に行くと、社会人と学生のグループがあって。彼らはインテリだったり裕福な家の子供だったり。それでも仲良く一緒にやりましたね。鎌倉、鶴沼、茅ヶ崎、大磯、大体この4つだったかな。あと東

京の下町に高橋太郎さん(日本で最初にサーフボードを作った)、テッド阿出川さん(日本で最初にサーフショップを作った)、そして千葉の鴨川に僕らみたいなやつらがいて、ほぼ同時発生したね。その後1965年にサーフィン連盟が組織化されて、66年には鴨川で第1回全日本サーフィン選手権があって。65年から70年代頭まで、すごく短い期間に凝縮されて一気にいろいろなものができた。この時期に日本のサーフィンの基礎みたいなものはでき上がってるんです。

一番面白かったのは、68年から70年代への移り変わり。それまでクラブ主体でやられていたサーフィンが、どんどん内面の世界に入っていくというか、個人的なものになってくるんですね。ウッドストックがあって、FENが全米ヒットチャートを流して、その頃は一番音楽がスゴい時

で、悪くいえばドラッグなんかも確実に入ってきて。海外のいろんな友達と話しても、みんな同じことを言うんです。68年当時の僕は18歳だから一番多感な時じゃないですか。その時に自分の生き方が決定しちゃった。サーフィンは、スポーツでもないし、やっぱり文化的なことなのかな。だからこれに没頭して信仰に近いやつもいるだろうし、「癒し」とかそういうレベルを超えたもの。みんなは軽く思ってるけど、もっとドロドロヘビーで深いものなんですよ。もう全人生を捧げるみたいな。70年代に入ってから「ライフスタイル」という言葉を使ってきました。サーフィンというスポーツ以上の生活様式ができちゃった。波のあるところに住まないと。苦労もして貧乏もして、だけどそれが屁でもない。サーフィンを通じていろんなところへ行くようになって、交流が始まって友達もできてコミュニティのネットワークができていった。

今僕が思うサーフィンのコア層は意外とサーフィンらしくない格好をしている。例えばビジネススーツを着て、朝ちゃんと七時に起きて会社に行って。だけどよく話してみると頭の中は完全にサーファーマインドになって、それがちょっとかっこいい気がする。ある意味、変装して街へ出てるみたいな感じ。家に戻ってきて波があればサーフィン。会社通いがどんなにかつるくてもちゃんと海に戻ってくる。そういう人

が多いですね。銀行員でもサーファーマインド、結構スゴいことだと思うんですよ。僕はああいう人達が今のコア、ハードコアなサーファーだと思いますね。顔を見て目がパッと合うと、こいつはサーファーだな、とすぐわかる。それが今のトレンドかなあ。



Michio Degawa

1950年生まれ。神奈川県鎌倉市出身。ノーブランドコーポレーション代表兼ヘッドシェイパー。サーフィン歴、シェイプ歴ともに40年以上の鎌倉のレジェンドサーファー。国内第一期プロとして活躍。78年日本プロサーフィン連盟を設立、理事に就任。83年にノーブランドコーポレーションを設立し「NO BRAND」を立ち上げる。87年JPSAロングボードディビジョンで初代チャンピオンに輝き、88年、90年にも優勝を飾る。ロングボードサーキットが本格的に始まると、ロングボードシーンをサポートする側にまわり、BEAU YOUNG、デヴィット木下、吉川祐二などをトッププロに育て上げる。

SURFING & FARMING



内野加奈子 interview

星や波や風だけを頼りに航海するハワイの伝統カヌー「ホクレア」。そのクルーの一人としてハワイから日本まで13,000キロを旅した内野加奈子さん。ハワイに拠点をもち、海洋写真家として活躍し、サーファーでもある内野さんに、サーフィンが教えてくれる人間に必要な感覚、そして農的な感覚との関係について話を伺った。

interview & text: 堀江大祐 (Media Surf)

ハワイ大学で海洋学を学ばれていたんですね。どうしてハワイに行こうと思ったんですか？

もともと人と自然の関わり方、特に海に興味がありました。海洋学を学ぶのをハワイに決めたのは、以前ハワイには観光地というイメージしかなかった時に、ホクレアが存在を知って、海と人の関わり方の深さに衝撃を受けて、そこでハワイのイメージが180度変わったんです。それに島という環境でより深く人と関わりある海、それを取り囲む世界、文化を知りたかったということもあります。

ホクレアとの出会いは？

ホクレアについては本で読んだことしかなかったのですが、正直目の当たりになって、自分の想像を超えていました。星、月、波、風だけを使って、何千キロも海を渡っていくことのリアリティを全くわかっていなかったんです。後々自分がそこに加わることになるなんて思いもしませんでした。最初は星や海のことを教えてもらったり、長い航海を終えたカヌーの修理を手伝ったりしているうちに、だんだんとホクレアのコミュニティに受け入れてもらえるようになって、ハワイの小さい島と島の間を航海に同行するようになりました。

ホクレアはどのようにして始まったんですか？

ホクレア号最初の航海は太平洋（ポリネシア）のなかでの航海でした。ハワイ、



ニューージーランドとイースター島、それぞれを結ぶ三角形をポリネシアと呼ぶのですが、言葉や文化に共通する部分がとても多いです。ハワイに最初の人が行き着いたのが約1300年前と言われていますが実際にどうやって辿り着いたのかがクリアじゃなくて、南米から人が流れてきたと言われたいりもしました。ただ言葉や文化に共通点があるポリネシアとの繋がりの方が現実的で、じゃあポリネシアの島々を繋いだのは何だったのか、というところで航海術に目が向けられました。

ポリネシアの神話や伝説のなかには星を読んで、海を渡るというものもあるのですが、実際の航海術はすでに失われてしまっていました。ただ幸いなことに、ポリネシアの向こうのミクロネシアの人々は航海術を代々継承していたんです。そこで航海術がシェアされて1970年代からハワイで伝統的な航海術が復活し、その象徴であるカヌーも復元されました。失われていた伝統が残っていたところから受け継がれた、という形です。

もともとは1回で終わるはずだった航海も、自分たちのルーツを探り、自分たちの祖先がこんな技術を持っていたんだ、という誇りを取り戻すきっかけになって、結局それから航海は続き、30年以上が過

ぎています。すでに地球を5周分くらいの航海をした後に、ハワイの人たちが行きたいと願う場所が日本でした。その時私はクルーになって5年くらい経っていて、日本への航海にも一緒に行こうと言われてもらいました。

航海中はどんな様子なんですか？

約20メートルのカヌーが2つ、デッキで繋がれている上で、11人が8時間交代くらいで舵を取ったりします。途中の島々でクルーを入れ替えたりもします。大海原のなかでいて、どこまでも広がる海に自分たちがぼつんという。たった20メートルのカヌーがあって、水があって、食べ物があって、その空間があることで、自分は確かに生きている。自分が何に支えら

れて生きているのか、自分の力で生きてるんじゃないかって、いろんなものに生かされてる感覚がものすごくリアルになりました。普段の生活でその感覚を維持するにはすごく想像力が必要ですが、なんでもある生活をしているなかで、自分で生きているんじゃないかって生かされているんだって思い続ける感覚はとても大切な気がします。航海しているときに、ずっと海だけを見続けてきて、遠くに沖縄の島がうっすら見えたときに、そこに大地があって水があって、緑があって、人の暮らしがある、ただそれだけのことが奇跡のような感覚になりました。太平洋の真ん中で風がぴたっと止まって、海が真っ平らになった時があったんです。本当に信じられない光景で、夜になると星が水面にうつって、360度星に囲まれました。そのときに、すごく大きな宇宙のなかにある自分の生命、地球の上での自分の立ち位置みたいなものを教えてもらってような気がします。

それは体験しないとわからないことですね。言葉にすごく説得力がある気がします。

それにホクレア号でもサーフィンできるんです。波は沖にもちゃんとあって、ブレイクしないけど波がきていて、カヌーは波をのるように作られているから、外洋でも波乗りができます。太陽も星も読めないときは、波を読む。もちろん波は変化するけれどある一定の時間だと方角を知る頼りになります。いろんなところから来る波の表情を読みながら海を進んでいきます。それには全ての感覚を使います。航海術といっても遠いところにあるんじゃないって、人間として持っている感覚を全部使う、人間が持っている感覚を取り戻す感じ、ですね。

今はGPSもあって、情報を教えてはくれるけど、その情報が必要か必要じゃないかは教えてくれません。結局は箱でしかない。たぶん私達はその箱がなかった時代を知っている最後の世代で、でも箱がなかったら生きていけなくなり始めている第一世代でもあります。自然を見る力、変化を読み取る力、変わっていくものが、変わっているっていうことに気がつく力が人間にはかならず備わっていて、それは人として失っちゃいけない力だと思うんです。

サーフはそういう感覚を思い出させてくれます。海ではごまかしがききません。波をしっかり見ていないと乗れないし、エネルギーについていけない。それはいくら本で読んでもわからなくて、どれだけ海のなかにいるかで、もともと備わっているのに眠っている感覚を取り戻している感覚があります。

今年の夏はブラウンスフィールドでインターンをされているんですね。

ハワイに暮らしつつも日本が大好きだし、



日本がもっと知りたかったこととブラウンスフィールドは農業をやっているというよりも、農的暮らし、農がある暮らしで、暮らしそのものに興味があって始めました。そこで土に近い生活をしていて感じるの、私たちがどれだけ自然から恵みを与えられているかということです。大地があって太陽があって水があって、耕して植えただけなのにむくむく育っていく。自分がコントロールしてない何かから恵みを与えてくれている、ということが生活のすぐ隣にあって、すごく生命力を感じます。大きな意味で生かされているという感覚が生活の真横にある感じがすごくいいんです。

今後の予定は？

今は自分が生まれたところでなにかやりたい！という気持ちがあるのでちょっとずつ日本に拠点移しをしています。大地の恵みを感じて暮らしながら、人も含めた自然界のありようから写真や文章を紡いでいけたらと思っています。地域に加わりながら、自分が食べるものや暮らしを支えてくれているものが、どこから来ているのかわかるくらいの範囲で生活が回っていったらすごく楽しいと思います。



Kanako Uchino
海洋写真家。ハワイ大学で海洋学を学び、ハワイ諸島のサンゴ礁モニタリングに取り組んだ後、写真家として独立。海と人のかわりをテーマに、写真・執筆活動を展開する傍ら、海図やコンパスを使うことなく自然を読み航海する伝統航海カヌー「ホクレア」の日本人初のクルーとして数多くの航海に携わる。07年、歴史的航海となったハワイ日本航海に参加。古の叡智を現代へと繋げる活動を続けながら、自然が織りなす生命の営みを伝える作品作りを手掛ける。ハワイ在住。
著書に「ホクレア 星が教えてくれる道」(小学館)。
kanaphotography.com



「ホクレア 星が教えてくれる道」
内野加奈子著
小学館
定価 1680円(税込)



SURFING & FARMING

松原広美 interview

クリエイティブで持続可能な未来を考えるウェブマガジン「greenz.jp」。そのコミュニティディレクターであり、サーファーでもある松原広美さんに人と自然、そしてサーフィンに関わりについて話を聞くために、とある日曜の朝、千葉の一宮でサーフィンをしていた松原さんに会いに行ってきました。

interview & text: 堀江大祐 (Media Surf)



「パーマカルチャー」を体験するために一か月間を過ごしたオーストラリア。

サーフィンを始めたきっかけは何だったのでしょうか。

高校1年生のとき、アルバイトで貯めたお金で一人ダイビングショップにいきなり飛び込んで行って、ダイビングのライセンスを取得しちゃうぐらゐもともと海が大好きだったんですが、ちゃんとマリンスポーツに入った時からです。競技レースをやっている、風を切る感覚がたまらなくて、大学4年間はずっと没頭していました。大学を卒業して社会人になってからは、ウィンドサーフィンは道具がかさばるので、なかなか気軽に行けなくなってしまって、手軽にできるのは？ということでサーフィンを始めました。そんなふうに移行していきました。

大学を卒業された後は、どんな仕事をしていたんですか。

大学を卒業してgreenz.jpをやる前までは外資系の金融会社に勤めていました。扱う額も大きいし、海外とのやり取りや、そこから生まれる責任はとても刺激的だったんですが、ある程度仕事が終わってきたときに、このままずっとこの仕事を続けていくのか、それとも自分の好きなことをライフワークしていくのが悩み始めたんです。でも自分が何をしたいのかははっきりしていませんでした。半年くらい自分に何ができるか、社会のなかでの自分の役割は何なのか考え続けていたのですが、はじめに興味を持ったのが、もともと料理が好きだったこともあって、マクロビオティックでした。旦那さんが忙しい人で、できるだけ身体にいいものを、と思っていた時で、そういう健康的なライフスタイルがあることに興味を沸いて、そこから自然や環境についての情報が目に向くようになりました。そうした情報を知って、考えていると、

会社でどれだけ働いても貧しくはないけど生活は刺激的じゃなくて、働くことと幸福度はイコールじゃなかったことに気がついて。働くってなんだろう、お金ってなんだろう、と考えているうちに、お金のかけない生活をすれば稼ぐ必要がないじゃないという考えに切り替わりました。じゃあお金のかからない生活ってなんだろうと考えはじめて、自分で食べ物を作ったり、エネルギーを作ったり、生活費がかからない、生活の基盤となるシェアハウスやカーシェアなどでお金をかからない生活をすれば、いい会社でいい給料をもらえるからいい生活ができる、という方程式が成立しなくなる思うようになりました。それにサラリーマンでいると、波のいいときや、自分が好きな時にサーフィンに行くことができず、オンとオフがある生活がいやでした。たとえば、台風が発生したら、そのうねりがヒットするであろう波を予測して、こっそり有給休暇をとるような生活は自分らしくないし、自然じゃないと思ったんです。

より自然に近い生活を考えるようになったんですね。

それから「パーマカルチャー」という考え方に会って、すごく興味をもって、ワークショップにも参加しました。そのワークショップで初めて畑に出て、土に触れて、自分で作ったものを食べるってこんなに美味しいんだって。こういう自然のなかにいると落ち着くんだなと思いました。それはサーフィンと一緒に、すべての細胞がいきいきする感覚で、心地よかったです。これがきっかけで会社も辞めてしまいました。

もつと「パーマカルチャー」というライフスタイルをデザインするというのを学んでみたくて、オーストラリアで1ヶ月農的生活をしました。そこには電気もガスも通ってなくて、すべてソーラーや風力、すべて自

然の自家発電でした。その時現地で世話になったホストに、「あなたは今自分の家で使っている電気がどこからきているか知っているか」とか「自分の家で飲んでいる水はどこからきているか知っているか」って聞かれて、そんなこと意識したことはそれまでありませんでした。そして自分のライフスタイルをデザインするって、そういうトータルなことも含めて見えないところまでちゃんと意識を払ってできることで、単にエコとか言ってちゃだめなんだと。人生観を変えたのはオーストラリアでしたね。ですから私の場合、環境問題をどうにかしなくちゃというより、自分たちの足元の暮らしそのものをサステナブルに変えて、またそれを可能にする社会の仕組みがないといけないと感じました。

その後、帰国されてからの活動は。

帰国した後に就職したNPOでgreenz.jp立ち上げに参加して、一時はものすごく大変だったのですが、やり続けているうちに辛い素敵な人たちに囲まれて、仕事も増えていって、2007年9月にリニューアルして、株式会社ビオビオを立ち上げました。本当にいろいろ大変だったけど、そんな悩みながらもバランスがとれているのはサーフィンのおかげです。病気にもならず、精神的に悩むこともなく、なにより海に行く心が洗われて、たくさんエネルギーをもらって、またがんばろうと思えます。サーファーでいることは自分が自分らしくいられるアイデンティティのひとつです。いつも自然をセンシティブに肌で感じていたくて、常に感性を研ぎ澄ましているために、一番近いのがサーフィンだったんです。精神状態が少しでも落ちてたりするとすぐにわかります。仕事で疲れてたり、考えごとをしながら海に入るとぜんぜん波に乗れないんです。雑念があったらサーフィンはできなくて、そこは自然が見透かしているんだなと感じます。海という大自然の中に入ると、自分も自然によって生かされていて、自然の一部だと感じるし、悩みなんで波と一緒に洗い流されてしまいますよ。

今後はどのように活動されていくのでしょうか。

お金のかからない、クリエイティブで楽しい生活を目指したいと思っています。自分自身、サーフィンができれば幸せだと思っている単純な人間なので、シンプルシ

を大事にする暮らしをデザインできたいいな、と。でも、自分一人が幸せになるだけでなく、社会全体がハッピーになるようなつながりが作れたらいいなと思っています。そうしたら、お金っていう価値観は存在しないかもしれないし、そういう新しい時代の暮らし方を早く広めていきたいです。いままでgreenz.jpというメディアを通してこんないい、あんないいって言ってきたけど、そろそろ自分たちが主体的にアクションを起こして、いろんな人、プロジェクト、リアルなスペースをつなげるオープンなプラットフォームとして進化させていきたい。「言っていること」と「やっていること」のギャップを最小限にするためにも、まずは自分たちが地に足のついたサステナブルな生活をして、いろんな人を巻き込み、コミュニティを創り、そこから生まれるリアルな情報をgreenz.jpというハブを通して世界に自慢していきたいと思っています。



シェイパー福田正勇さんと。

Hiromi Matsubara
greenz.jp コミュニティディレクター。株式会社ビオビオ代表取締役社長。78年東京生まれ。イギリス、アメリカで計6年間過ごす。大学卒業後、ゼネラル・エレクトリック(GE)社のリーダーシップ開発育成プログラム(TRE)として入社し、法人金融営業、マーケティング、CSRのイベント企画、運営を経験。06年、NPO法人に転職し、「greenz.jp」の営業プロデューサーとして立ち上げにかかわる。08年株式会社ビオビオ設立。greenzの経営企画、営業戦略、海外渉外、環境や社会問題をテーマにしたイベント、キャンペーンのプロデュースも手がける。夢は海辺のエコビレッジの村長!



greenz.jp
クリエイティブで持続可能な未来を考えるウェブマガジン。アメリカで大反響を受けていた「不都合な真実」について国内でどこよりも早くレポートするなど、国内・海外の旬なエコトピックスを日々アップしている。ニュースサイトの他に、水素自動車コンバート計画や、気軽に飲めるエコ飲み会など、リアル方面でも活躍。<http://greenz.jp/>

シェイパーという存在

日本のサーフィン文化創世期からサーフィンに関わる続け、多くのファンに支持されるシェイパー・福田正勇氏に会いに行った。

text: 堀江大祐 (Media Surf)



店内に並ぶサーフボードは圧巻。

千葉・幕張の住宅街のなかにあるサーフショップ「HAMILTON」。「こんなところにサーフショップが!?」と初めは驚いたが、この「HAMILTON」はショップのマネージャーであり、シェイパーである福田正勇氏を作るボードを求めてファンが足繁く通うショップなのだ。「お客さんは40～50代が多くて、若くても30代前半で、みんなマニアックな人たち。場所もこういう場所なので本当にほしい人しかこない」と福田氏。

ショップ兼工房となっている店内にはオーダーを受けて作られている、それぞれの制作段階のボードが並んでいる。ボード1本の制作期間は約1週間で、月に4～5本を作るという。「お客さんと話していると性格が分かる。それは重要な情報。できるだけセッションしたほうがいい

ね」とお客さんが本当に求めているボードをイメージしていくそう。「難しいことじゃなくて、お客さんがどうサーフィンがやりたいか。とにかくサーフィンが楽しくなるように作りたい。僕は仕事だけど、お客さんはそうじゃないからね。お客さんのサーフィンスタイルや「大きな波に乗りたい」「ゆったり乗りたい」など様々な希望を叶えている。

福田氏が「HAMILTON」をオープンさ



作業を見せられる福田氏。テープを貼っているボードはスリーストリンガーという、通常ボードの中心にねじれ防止のために1本入っている木が3本入っているもの。これができるシェイパーは福田氏をのぞいてはほとんどいないという。



樹脂を塗る作業。この作業はスピードと正確さを兼ね備えた熟練の技術が必要。

せたのは25年前。「クラシックスタイルのボードを扱う店をやりたいって、そういうボードを買う人は年下のヤツからは買わないから、ある程度の年齢になるまで待った」というショップでは最初は既製品を扱っていたが、先輩の「板を作っている店は潰れない」との助言もあり、オーダーでボードを作りはじめ、以来2000本以上作り続けている。全行程において他人の手を入れずに福田氏一人で作り上げられるボードには多くのファンがいる。

自身のサーフィン歴は17才からはじめて40年以上。まだショートボードが入ってきていない日本サーフィン文化の創世期で、1960年代前半には始めた頃には日本のサーフィン人工は200人程度。千葉には20人ほどしかいなかったそうだ。そうした時代からサーフィンに関わり続けている福田氏のサーフィンに関する経験や知識もファンにとって魅力的なのだろう。もちろんそれらに基づいた技術や感性については言うまでもなくファンを虜にしている。

サーフボードは時代とともに進化し、時に芸術品とも言える造形が生まれる。福田氏の手からもそうしたボードが生まれている。その舞台となる好きな工房のなかにはサーフィン、そしてボードと向き合い続ける「ものづくり」のおいしがた。

MASAO FUKUDA
1948年柳橋の料亭「ときわ」の末っ子として東京、浅草に生まれる。66年自宅に下宿していたアメリカ人よりサーフィンを教わる。72年渡米。カリフォルニア、ハワイのSURF CULTUREを実体験する。84年千葉県幕張にサーフショップ「HAMILTON」をオープン

HAMILTON
住所: 千葉県千葉市美浜区幕張西1-12-10
TEL & FAX: 043-273-7311
www.surf-rider.net

都市をRe-Designする 「Green Island」の試み。

「街に緑が溢れたら……」。そんな想像をしたことのある人も多いはずだ。そんな緑溢れる街並みを、実際に作り出してしまった人たちがいる。それが、「Green Island」プロジェクトだ。と言っても、これはComputer Graphics（以下、CG）の話。とはいえ、これらの写真が与えるインパクトはとてつもなく大きい。「緑」は、人間の心をこれほどまでも強く刺戟するものか。「Green Island」プロジェクトのプロデューサー田口亮さんに、プロジェクトを始めた背景や想い、今後の展望などを聞いた。

interview & text: 萱原正嗣(カヤハラマサツグ)

「Green Island」プロジェクトを始めたきっかけを教えてください。

きっかけは、ものすごく細なできごとです。ある日、子供を連れて、東京ミッドタウン・ガーデンに遊びに行きました。遊具も何もない公園ですが、とにかく芝生のきれいな公園です。そこで、遊びに来ている子供たちが、芝生を見て興奮し、転がったり走りまわったりしている姿を目にしました。

私をはじめ、「Green Island」プロジェクトのメンバーは、FOURDIGIT Inc.というウェブ制作会社に所属していて、その中で、私はクリエイター／ディレクターとして仕事をしています。仕事柄、表現やアートに関心があって、アートの本質みたいなことを考えることがあります。アートには色々な側面がありますが、「人の心を刺戟する」ということが、アートの重要な本質ではないかと思っています。だとすると、子供の心を刺戟した、広くてきれいな芝生は、立派なアートではないか、と思ったわけです。そこから、「街が緑の芝生に覆われたら?」「道が芝生だったら?」ということ想像するようになりました。

一方で、会社の仲間たちとは、ウェブ制作を通じて培った技術を、違った形で表現したり、活かしたりしていくことはできないか、ということをお話していました。そこで、芝生のことを思い出し、CGで緑溢れる街を作ってみようということになりました。

プロジェクトへの想いを教えてください。

最近では、「環境」が社会的に大きなテーマになっていて、私たち自身も大きな関心を持っています。私たち一人一人は規模も小さく、大企業のように植樹や井戸掘りといった大掛かりな活動はできません。ですが、「緑で街を覆う」という人々の想像を実際に視覚化することで、「未来をポジティブに想像する」という行為を少しでも喚起していくことができたら、と思っています。

また、少し視点は変わりますが、「なぜ道路を芝生で覆うだけなのか?ビルも壁も緑で覆ってしまえばいいのでは?」というこ



TOKYO SHINJUKU03 created by imkw (Green Island) Copyright©2008 Green Island All Rights Reserved.

とをよく言われるのですが、そこにも大きな意味を込めています。建物は、規模の大小を問わず、必ず誰かがデザインしたものです。一方で、道路は誰もデザインしていません。輸送という機能を満たすために、アスファルトを敷き詰めただけのものです。「人工的な都市のなかで、誰もデザインしていない道路を、意図的に緑で覆う」ということが、人々の意識をスイッチするきっかけになるのではないかと考えています。

初めてこの画像を拝見したときに、心躍る感情というか、ポジティブな意味でとても大きな「刺戟」を受けました。同じように感じている人も多いと思うのですが、反響はいかがでしょう?

ありがたいことに、非常に大きな反響をいただいています。国内だけでなく、国外からもウェブサイト(プロフィール参照)へのアクセスがありますし、ソーシャル・ブックマークもされています。また、コニカミノルタ社主催の「エコ&アート アワード2009」では、グランプリをいただきました。「pen」や「ブレン」といった雑誌に加え、国内外のウェブ・メディアでも紹介してもらっています。緑やヴィジュアル表現を持つパワーの大きさを改めて実感しています。

今後の展望について教えてください。

まず、この活動の認知を上げたいと思っています。それには、何らかの形で世の中にアウトプットしていく必要があるのですが、こういった紙面で紹介されたり、コンペティションに積極的に参加したり、露出する機会を増やせればと思っています。また、最近では環境活動を企業のアピールとして行うことも増えていて、そういった方々からもポジティブなフィードバックをいただいています。道路に芝生を敷き詰める、というのは、クルマが主要な交通手段であり続ける限り、さすがに実現は難しいと思います。ですが、私たちの作品がきっかけとなって、緑溢れる街並みが増えていったとしたら、それはとても嬉しいことです。私たちが具体的にどう関わっていけるかは全くの未知数ですが、現実の世界にも何らかのアウトプットをして



TOKYO SHIBUYA03 created by imkw (Green Island) Copyright©2009 Green Island All Rights Reserved.

いくことを目指しています。

インタビューを終えて(筆者コメント)

この、「Green Island」プロジェクトは、都会に住む人に、都市と自然との距離感、人間と自然の距離感を問いかけたものではないか。クルマ社会が続く限り、「芝生の道路」は現実味が乏しいが、少し考え方を変えれば、「芝生の道路」を実現するために、芝生でも走れるクルマの研究開発する、という発想もありではないかと思う。たかがイメージ、されどイメージ。人々の固定観念のなかにある都会と自然の距離感を一変させた「Green Island」プロジェクトは、「都市をRe-Design」する試みと言えるだろう。



TOKYO AKIHABARA created by imkw (Green Island) KONICA MINOLTA ECO&ART AWARD'09 展覧作品 Copyright©2009 Green Island All Rights Reserved.

Green Island Project
WEB制作会社FOURDIGIT Inc.クリエイター発のプロジェクト。プロデューサー/田口亮とレタッチクリエイション/IMKW、サイト制作/Immrの3名で行っている。8/28-30に行われるグッドデザインエキスポ2009にも出展。
<http://www.006600.jp/>

Masatsugu Kayahara
もの書きの傍ら企画・編集にも携わる。昭和51年生まれ。京都大学法学部卒。IT企業に就職するも8年で脱サラ。現在は環境、農業、仕事(働き方)について筆を執る日々を過ごす。

Answers Lee's Choice

がまん、がまん! 沈黙の臓器たち



text: Alexander Lee Chang

3年くらい前だろう、僕は夏だけサーフィンをしてた。というか3回だけした。素人の僕はパドルで沖まで泳ぎ、いい波がどれか全くわからず、板の上でおぼつかない波待ちスタイルで、水中で足をバタバタしていた。しかも、全くどの波が良いのかもわからないのでただ待っていた。その時いつも考えていた。水面から下の見えないおおきな水の中のこと。実は僕はそこがすごく怖かった。なぜかって? なにか、大きな力をこの水のなかに感じるのである。いつも2本の足で立っている自分がここでは立てない。板という浮き輪が無ければじっと浮いていられない。ちっぽけな自分を感じ、自信を失い、裸ん坊の自分にさせられてしまうからなのかもしれない。海のなかには本当に大きな世界があり、大きな力が宿っている。僕はそう信じている。裸ん坊の自分と向き合うことできるのがサーフィンの魅力なのかもしれない。まだまだかなりの未熟者ですが……。

僕は菜園を2年前からやっている。ここでも、同じようなことがよく起こる。土作りをするときにかなりの量の土を耕すのですが、この時すぐにミミズ君や何かの幼虫君に遭遇する。たまに何も無いかな? って思ったらいきなりデカイ根に遭遇して、その根をたどると馬鹿デカイ樹木にぶつかっ

たりする。土は地に宿る生物に大きな力を与えてくれる。樹木は土からの栄養分を取るために地上に出ている自分体以上に大きく根を張り巡らせる。土は地上にある熱を吸収し冷やしてくれる。そういえばこの間、友人に連れられ古い土間床のそば屋にいったが、お店の中は本当に涼しく、雰囲気は暖かい。ただ今の法律ではなぜか土間作りの床は禁止になっているらしい。寂しいなあ。

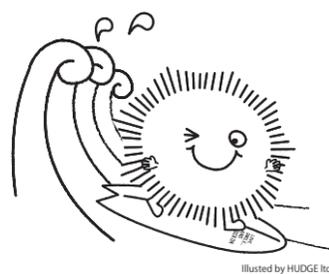
海も地もやっぱり、大きな力の持ち主だし、僕たちは大きな恩恵をもらっている。ただ、地のほうがすこし、優しいのかもしれない、海には波があるけど、地は何も言わないから……。たまに地震とかあるけど。僕の肝臓のように静かに、アルコールを吸収し、いつか爆発するのかも……。気をつけよう!

アレクサンダー・リー・チャン
1975年サンフランシスコ生まれ。アパレルデザイナー/プロスケーター/アーティスト。幼少期のカリフォルニアにてスケボーと出会う。10代の頃からプロスケーターとして活躍。96年より7年の間、アパレルブランドのディレクターを経て、03年独立し[Chang Co., Ltd.]を設立。04年 S/Sよりスタートした[AlexanderLeeChang]ではアーティストとしても活動する彼のDIY精神で凝ったディテールと構築的なフォルムのプロダクトを生み出している。立体作品、コンピューターグラフィックなどが得意。

つぐよくだものとりつかせい

ヨコリズム

text: 成瀬大輔(フタバフルーツ三代目)



Illustrated by HUDGE Ltd.

サーフ&ファーム。一見何のつながりがあるのかと思うが、そこには地球上で大切な海と大地が存在する。母なる海に癒され、聖なる大地にパワーという恩恵を受ける。まさに生きる証である。海に生きるサーファーは常に気象状況が気になる。同じく大地に生きるファーマーも同様である。両者とも自然のリズムを常に感じ生活していると思う。サーファーである僕は、海へ向かう道中、様々な畑や田んぼを目にすることがある。若い頃の僕はその景色を何も意識せず海に行っていたが、フタバフルーツ三代目という現在は、フルーツや野菜ができる畑が気になる。海のそばにある農地から美味しい食材が生まれている。サーファーは無意識のなかでもいつもこの景色を目にしているのだ。

僕は考える……今ある、僕という人間に多大なる影響を与えてくれたサーフィンを通して自身の店作りやお客様とのコミュニケーションをサーフ&ファームでできないだろうか? 朝一でサーフィンをし、畑に立

ち寄り、収穫したフルーツや野菜をサーフボードとともに車に積み込み、昼過ぎには東京の店先にて販売することも可能である。また、朝採れたてのフルーツや野菜をサーフショップで売ったりするのも面白いかもしれない。サーファーが作るフルーツ、サーファーが認めた野菜などがブランド化し、サーファー特有の横の繋がり(ヨコリズム)が農業に新しい風を吹き込むのではないかと考えたりもする。それには、海と大地のリズムが感じられる空間が求められる。

サーファーが伝える農産物
サーファーが伝える食材
サーファーが伝える料理

フットワークの軽いサーファーならではのアイデアによりできることは! ヨコリズムを大切に、縦だけではなく横にも意識を向け、僕の原点でもあるサーフィンとフルーツ屋によって笑顔一杯の空間を作っていきたい。笑う門には福来る。サーフ&ファームでたくさんの福を呼び込もう…… yei !!!

Love, Smile... and ROCK ON



Daisuke Naruse 'DaiDai'
1970年東京生まれ。西武新宿線都立駅前のフタバフルーツ三代目。サーフィンやスノーボードを通じて自然や仲間の大切さを学ぶ。自然の恵みであるフルーツをさまざまな角度からアピールし、フルーツ本来の可愛らしさや美味しさを伝えていくべく活動中。道すがら仲間が集まり、クリエイティブチーム MEOWを発足。ものづくりからイベント企画まで、想いのままに動き回る。
www.futaba-fruits.jp

SURFING & FARMING

いまなぜ？ “農業ヤング”広がる

農業に惹かれる若者たちの実態

text: 清田直博(media surf)



若者向け雑誌で農業特集が生まれ、農業体験に参加する若者が増えているという。もはや農業は、土に還る準備を始めた中高年の方々だけでなく、若い人々の心も確実にとらえ始めている。一見地味で地味な農業に、遊びたい盛り若者たちが惹かれるのはなぜ？ ひょっとしてこれも草食化の影

響？編集部はこんな農業寄りな若者を“農業ヤング”と名付け、彼らにアンケートを採りその実態を調査した。

質問① 農業に携わようになったキッカケは？

- 1位: 人との出会い(回答数6)
友人の家でお手伝い/田植え体験イベントに参加/師匠と呼べる人と出会い/友達からの影響/林家や農家の方と触れ合う機会が多かった/野菜食べるときの好きな娘のおいしいって言う顔が好き
- 2位: 癒し(回答数2)
仕事に疲れて日常的に自然に触れたいと思った/生きづらい世の中だと感じていたので農的な暮らしに活路
- 2位: 仕事で(回答数2)

会社に農業部門があった/菜園の運営に携わようになった

- 2位: 憂国(回答数2)
業(なりわい)が疲弊していること/食の安全が危機にあること
- 3位: スキルアップ(回答数1)
サバイバルするためのスキルとして興味を持った

質問② 農業の何に魅力を感じますか？

- 1位: 安心感(回答数9)
自分で作ったものを自分で食べられる/自給自足、生きる/口に入れるものを自分で作れる/食べて安心なものを家族や友人に振舞える/食べ物をお手で作っているという実感/着実に生き物が成長して糧になるのが実感できる/実をならせること/いざとなった時に作れるという安心感/新鮮な野菜を食べられる幸福
- 2位: 生き方(回答数4)
生き方そのもの/人にも環境にも負担をかけずに生きられる/資本主義の流れや政治に左右されずに自由に生きられる/自然と生きている実感を持てる
- 3位: 労働の成果(回答数3)
労働の成果が目に見える/自分が手をかけたらかけただけ植物が応えてくれる/自分の作った作物に責任を持てる
- 4位: 癒し(回答数2)
作業をしている時、無になれる、ストレス解



消/なぜかとても癒される

*その他回答

農業は奥が深く飽きない/自然との対話/作業する人々にコミュニティが生まれる

質問③ 農業以外に興味があることはありますか？

- 1位: アウトドア系(回答数7)
ゴルフ/家を建てる、改修/旅行/サイクリング/馬/車/フランス
- 2位: つながり(回答数5)
人とのつながり/地域社会の活性化/地域づくり/農業と他の分野をつなげること/働く女性クリエイターを応援する仕組み作り
- 3位: インドア系(回答数4)
サブカルチャー全般/クラブでのダンスイベント/ホームパーティー/ Web

質問④ 将来的に農業とどのように関わりたいと思っていますか？

- 1位: 実践したい(回答数8)

自分の家で食べる程度の量の野菜を育てて暮らしていきたい/狩猟採集的なかたちの農業をしていきたい/自分で作れる分は自分で作る、できないものはシェアする/とりあえず週末農業を継続/家庭菜園を継続/自分の作った野菜で、家族を笑顔にさせたい/半農半ブックカフェ/自分で野菜を育て、運んで、売ることをベースに会社を家族で経営する

2位: 広めたい(回答数4)

東京近郊で農園を持ち、いろんな機能を掛け合わせた場所を作りたい/アグリツーリズムの企画をしたい/農業の楽しさを広めたい/安心安全な農業資材の普及

3位: 考えたい(回答数1)
実家の家業(農業)をどうしていくべきか真剣に考える

*アンケート回答者データ(n=12)
・回答者年齢: 20~39歳(平均30.4歳)
・職業: 研修生/農場長/会社員/学生/有機農業研修生/無職/ライター/編集/起業家
・農業歴: 平均2.6年

若者が「金の卵」と呼ばれ、農村から都市部へ集団就職した時代から約半世紀。心の安らぎと人や自然とのつながりを求め、都市から農村へと若者が動き始めている。

アンケートに回答いただいたみなさんありがとうございました！

ムラアカリをゆく旅 2

1200倍の奇跡、そして土を耕すライフスタイルに純粋に目を向ける時

text: 友廣裕一



「お米っていうのは、一粒が1200粒にもなるんだ」。先日まで約半年間をかけて日本中の農山漁村の現場を訪ね歩いてき

ただが、この言葉は、ある農家のおじさんから聞いた言葉。改めて調べてみると、大体1000~1500粒を突らせるとい

うことで概ね正しいようだ。この数字を聞いた時、正直驚いた。農村に対するイメージは、この一言を聞いたことで大きく変化した気がする。たった一粒の米が1200粒になると言う奇跡。これは農村、そして農業が持つ懐の深さを言い表していると思う。

この奇跡は、水と土と太陽、そして作り手の手間と愛情によって生み出される。一般的に都市は集約化が進められ、田舎よりも効率的に価値を生み出す仕組みが用意されていると考えられる。しかし、である。東京にいて、恒常的に1200倍の価値を生み出すようなビジネスを見たことがある人はいるだろうか。加工や編集というものも立派な価値だと思いが、耕すことを忘れた社会はどこかで綻びが出てくるような気がする。

最近よく目にする言葉に、CSA (Community Supported Agriculture) がある。これは「コミュニティで農業を支える」という意味で、消費者が生産者を買って支えようという動きである。これに関してもある農業関係者の方は「本当はASC (Agriculture Supported Community) が正しいと思うんだよ」と言っていた。つまり「農業があるから地域は存在できるのだ」と。これは災害の時を想定するとわかりやすい。都市直下型地震があった時、交

通が遮断されたら都市で人間が生きていくことはできない。阪神大震災の時にも、神戸が震災に見舞われたあと被災者を救ったのは兵庫県内の農家による炊き出しだったと言われている。都市は、農村がないと存在できないのだ。「限界集落」という言葉が巷に出回っているが、こういう文脈を辿っていくと「東京こそが限界なのでは？」と帰結するのは正しい理解であるような気がする。

ここまで「農業」と一括りで書いてきたが、ちょっと見逃せない現象もあった。それは大規模化が可能な農業地帯よりも、慣行農業が成り立たなくなった中山間地などにIターン若者を多く見かけたということだ。これは私の偏見も加わっている可能性があるが、しかし後者における若者の存在は紛れもない事実である。全国各地で本当にたくさんのIターンの方々とお会いしてきた。彼らは得てして都会出身であったり、高学歴であったり、安定した社会人生活に見切りをつけて来たという人が多い。このミクロな現場での動きからは、マスコミなどでよく目にする「儲かる農業」のブームとは別の流れを感じた。それは、ビジネスとしての「農業」ではなく、ライフスタイルとしての「農の生き方」とでも言うべきものを求めているということだ。都会で小さな利益を取り合って競合他社を蹴落として

たり、コスト削減に多くの時間を割いたり、仲間をリストラしたり、そういった生き方に疑問を持っている若者は多い。右肩上がり社会に対して、憧れをいだくことさなくなった若年世代が「生き方」に目を向けるのは当然の帰結である。想いを込めて土を耕し、1200倍の恵みを得て、自分の作ったものを求めてくれる人に届けて喜んでもらう。このようにして生業を得たいと願うのは人間として自然な流れだと思うのだ。いまこの時代だからこそ、1200倍の奇跡、そして土を耕すライフスタイルに純粋に目を向ける時ではないかと思う。



Yuichi Tomohiro
2007年3月早稲田大学商学部を卒業。在学中〜卒業後にかけてベンチャー企業2社の創業に関わり、社会起業家ビジネスプランコンテスト[STYLE4th]事務局、学生団体「早稲田リンクス」幹事長などを経て日本一周の旅へ。
ムラアカリをゆくhttp://murakari.com/

RE-FARMにはハンターが必要

text: 伊藤洋志(農業ウェブマガジン「ザックザック」編集長)

ハンター試験が東京でも行われる。思えば、自分のこれまでの人生はハンターと名乗るにはどうしたらいいかということ一点だけを考えていた、ような気がする。マンガの読みすぎである。じつは既に狩猟免許(網、ワナ)は一度取得したのだが多忙の会社員時代に、更新忘れて失効している。就職活動を控えた学生時代に資格を持たなければ!と思い、取得した。資格欄に普通自動車免許、狩猟免許(網、ワナ)と高らかに記名したわけだがこれが非常に強力なフィルターになったためか、逆に一次面接で落選する企業も多発した。しかし、これは別にふざけているわけではなく、いまハン

ターも高齢化で減少していて不足しているというも面白いと思う。なぜなら、イノシシなどの農作物被害はしゃれにならないほどでかくなってきているからだ。以前は、よく人が山に入っていたため、人里に獣が近づくとチャンスは少なかった。しかし、いまや農村は高齢化が進み、山に人が入らなくなってきた。そうして、山奥にいた獣たちが勢力地を拡大し、畑の味を覚え、しばしば人の世界に侵入して作物を奪うようになってきているのである。獣は、収穫直前のタイミングを必ず狙って襲いに来るから、とにかく農家のやる気を削ぐ。農業している人の平均年齢も6割ちかくが65歳。その

なかで、せっかくだら「明日収穫しよう」と思っているときに根こそぎやられた!というエリアが広がっているのである。

そんなわけで、野生動物と人間の生活をどう折り合いをつけていくかという考えもすっかりハンターの養成は、これから農業を再構築していく上で実に重要なことである。すぐれたハンターが地域にどれだけいるかで、農作物被害の大きさが変わってくると思う。

新しく農業を始める人が土地を手に入れようとする、だいたいそういう獣が現れる「やっかいな」土地が多い。便利な土地はなかなか手放さないことが多いものだ。だ

から、これからは田舎で農業をはじめるとは、せつなくイノシシが来る土地で農業を始めたのなら狩ってしまえばいい。ハンターになればいいのだ。食料も得られるし一石二鳥。何を食べているかわからない牛肉よりも、彼らは木の实などあからさまに健康によい食べ物を食べているからさぶる健康な肉だ。そう見ると、ただの不利な土地が実は好条件な土地と見られることもできる。

最後に、ハンターになるにはどうしたらいいのか。まず、第一の関門はハンター試験(狩猟免許)に合格することである。狩りは誰でもできるのではなく、ハンター試験に合格した人にだけ許される。どういう動物なら獲っていいか、どういう道具は禁止されているか、ということ最低限覚えなければいけないのである。この試験は東京都なら9月6日、23日の二回だけ行われる。わたくしも、今年再チャレンジするつもりだ。将来、農業をはじめたいという方も、試験だけでも

受けておいて損はない。(実戦に出るにはさらにハードルがあるが)

*狩猟免許の詳細は東京都のサイトでご確認ください。



狩猟免許に合格した時の筆者

Hiroshi Ito
生きた仕事をつくる集団ナリワイ代表 ナリワイノイ支部をつくることになり、現在世田谷本部の新メンバーを募集中。ナリワイギャラリーの運営やナリワイづくりをやるナリワイズを主体的に探しています。あと、フリーランスの人を集めた組合を作る予定。
http://nariwai.org/

インターネット今昔物語

今の我々にとって、ネットは人生の一部となりつつある。

text: akio0911(Hacker's Cafe)

日本のアニメ映画「Ghost in The Shell」の中で、「ネットの海は広大なわ」という台詞がある。ネットの海が広大な故に、ネットの歴史も広大かつ深遠である。ここでは僕の極めて個人的なネット体験という限られた切り口で書く。

まずはパソコン通信について書かねばなるまい。パソコン通信というのは文字の読み書きでコミュニケーションを行う仕組みである。動画も写真も無い世界である。NIFTY-ServeやPC-VANなどの商用サービス、そして個人が自宅に電話回線を引き自前でサーバーを用意して皆にサービスを提供する草の根BBSも多数存在していた。今のインターネットと違い、これらは相互につながってなかった。PC-VANを見た後に草の根BBSを見たければ、一旦回線を切断して、別の回線に接続し直さなければならなかった。

そんな状況のなか、海外からインターネットが入ってきた。文章のなかに画像が埋め込まれていることにビックリした。

しかも全てのページは陸続きになっていて、リンクをクリックするだけで、別のページへ次々と飛べちゃうのである。当時GoogleやYahooはなく、個人サイトの運営者が手動で更新情報を追記していく「NTT新着情報」。そして個々のサイトに存在する「リンク集」が重要な道しるべであった。よって、面白いサイトを発見した時にブックマークを忘れてしまうと再び訪れるのが困難であった。

そこで海外からYahooが上陸した。多数のサイトがカテゴリ分けされており、面白いサイトを簡単に見ることができるようになった。続いてGoogleの上陸。語句を入力するだけで、瞬時に関連ページへ行けるようになった。お気に入りのサイトはブックマークへ入れておくと、再度見に行っても更新されていないということが多々あった。それを改善するWWWCというアプリが登場した。お気に入りサイトを登録しておけば、サイトの更新を自動的に通知してくれるのである。更新アイコ

ンが付いている箇所をクリックするだけで、サイトを効率よく巡回できるのである。

この頃、個人サイトには日記というコーナーがあった。日記を書くには、HTMLを書き、それをFTPでアップロードするという面倒な手順を踏まねばならなかった。そこでウェブ日記を書くためのシステムが普及した。このシステムを設置しておけば、わざわざHTMLを書かなくても簡単に更新できるようになった。更に海外からブログの仕組みが入ってきた。コメントを付けたり、トラックバックを送ったり、RSSを購読したりできるようになった。RSSというのはブログの個々の記事に関する更新情報がまとまったもので、これをRSSリーダーに入れておけば、更新情報を効率的に読むことができるようになる。そしてmixiなどのSNSサービスが開始された。友達とのつながりが可視化され、近況を日記で共有できるようになった。

最近では海外のTwitterというサービスが急速にユーザーを増やしつつある。140文字の短いつぶやきを書き込み、多数の人々と共有できる。日記と違い、気軽に書き込める。Twitterでは同じ興味を持つ人々が急速につながっているようだ。Twitter上でコンプレッションアルバムが生まれたり、転職が成立したり、結婚するキッカケとなったりしている。

現実世界を模したBBSやメールなどから始まったインターネットは、Twitterというネット独自の仕組みを生み出し、それ



が現実世界へと多大な影響を及ぼしている。ネットサーフィンという言葉は現状にそぐわないかもしれない。現実もネットもまとめて現実として認識し、双方をサーフィンする。今の我々にとって、ネットは人生の一部となりつつある。

akio0911
1978年生まれ。制作集団「ハッカーズカフェ」に参加。手作りデバイス「拡張現実メガネ」、同人誌「破滅論」、ARゲーム「脳脳スターラー」、位置情報ゲームイベント「ジオジオスタンプラリー」、iPhoneによる自己表現バッグ「モバイルデジタルサイネージバッグ」などの制作に関わっている。
http://d.hatena.ne.jp/akio0911/
http://twitter.com/akio0911

のりピー逮捕！ 「ネットサーフィン(笑)」に 代わる言葉を作るぞ

「ネットサーフィン」は
ますます恥ずかしすぎる言葉になった。

text: 中川淳一郎

「ネットサーフィン」という「ネットのあちこちをクリックしまくる」を意味する言葉はもはやネット黎明期の牧歌的な1990年代後半～2000年代以降は死語と化した感があるが、この衰退をさらに加速した感のある事件が発生した。それはのりピー逮捕である。いや、より正確に言うと、のりピー逮捕の前に発生したのが夫の「自称プロサーファー」氏の覚せい剤取締法違反による逮捕である。この件によ

り、ネット界隈では「サーファー」ということばを使う場合は「サーファー(笑)」[自称プロサーファー(笑)]のように「(笑)」がセットで書かれるようになった。タダでさえすでに「ネットサーフィン(笑)」と嘲笑の対象になっていただけに、実に我々ネットヘビーユーザーからするとこの「ネットサーフィン」はますます恥ずかしすぎる言葉になったと言えよう。となれば、当然オレ達は「ネットサーフィン」に代わる「ネットのあ

ちこちをクリックしまくる(暇つぶし)行為」を意味する言葉を生み出さねばならぬ！そこでオレは提案する。お前ら、これはどうだ？ テキトーに広めてくれ。

「ネットつまみぐい」
「ネットザッピング」
「ネットダイビング」(サーフィンではなくマリンスポーツのうち1つの種「ダイビング」に人身御供になってもらった)
「人差し指の過剰運動」
「手マンをネット見ながら練習」(おい、中指はどうした！でも、そんなの関係ねえ！)
「ネット見ながら乳首転がしの練習」

途中から下品になったが、まあ、所詮「ネットサーフィン(笑)」なんて言われる程度の行為だ。よしとしてくれ。とにかく「ネットサーフィン」はもうやば過ぎることばだ(つーか、使うヤツなんてもういないのは分かってるけどさ)。老人から「おまはら網(ネット)を使ってシャブを決めてるのかい。はあ、近頃の若いものやることはわからんのか」「納豆(「ナットウ」と「ネット」の区別をつけていない)かきまぜながらシャブを決めるとは、近頃の若いものはなかなか健康に気を遣っておるのか」なんて言われる前にとりあえず、上記のオレが

挙げた6個のことばを「ネットサーフィン」の代わりに普及させてくれ。頼むぞ。そうすれば、オレたちネットヘビーユーザーは不健全なイメージから脱却できる。「近頃の若いものはなかなか少子化対策に取り組んでおるのか」と感心されるかもしれない！頼むぞ、日本の若者！頼むぞ、日本のネットヘビーユーザーたちよ！



Junichiro Nakagawa
ネットニュース編集者/雑誌編集者。現場の視点から書き続ける編集者。1973年生まれ。1997年一橋大学商学部卒業後、博報堂入社。コーポレートコミュニケーション局で企業の広報活動業務を行う。01年に退社。「日経エンタテインメント」にライターとして携わる。その後、「テレビブロス」編集者を経て06年よりニュースサイト編集者となる。日々のインターネット漬け生活から浮かんできた「ネットは集合知を生む」「ネットは社会変革をもたらす」といった牧歌的なウェブに対する論調に反発し、ネットがもたらした「現実」を書きあげた「ウェブはバカと暇人のもの」(光文社新書)を上梓。

PARTYの
PARTYによる
PARTYのための
ウェブマガジン
stylus.
創刊.

www.partystylus.com

パーティー・スタylas 検索

慎吾とサーフィン

text: 木下拓海

無職の居候からフリーランスとして何となく仕事を始めて、はや5年。まるで契約書的なものを取り交わしたことがないまま、ただの勢いだけで今日に至りました。そんなのくただって情熱さえあればいいさ！言うなれば、台風の大波にボード一つで突っ込んでゆくサーファーの心意気です。

これは間違っていないかと思えます。でも気がつけば、クレジットカードもない、免許もない(取り消しになってしまった)、おまけに家の名義も元の借り主である元彼女のまま。給湯器の調子がおかしくなっても、大家さんになかなか切り出せません。おまけに最近、銀歯がとれてしまいました。

もちろん、健康保険にも入っていません。

非常にやりづらさを感じています。TSUTAYAで会員になるにしても、免許も保険証もないし、公共料金の支払いの名前も元カノのまま。唯一の頼みの綱は、自分が日本人であることを証明してくれるパスポートのみです。

このままでいいのだろうか！これまで「若さ」だけで社会の荒波をサーフしてきた私にとって、急に不安になってしまう出来事がありました。「こち亀」の香取慎吾です。

彼と私は同い年。ご存知の通り、香取はスマップのなかで一番のぶりっ子キャラで、どこまでも弟分的な存在。私もそうい

ポジションで今まで仕事をもらってきました。私も香取も、どちらも実年齢よりも若く生きようとする、ネバーランドの住人です。

自分と香取はどこか似ている。それに気づいて以来、香取を一つの指標として見るようになりました。香取の姿を通して、自分は社会のなかでどう見えているのかを客観的に捉えてみようと思ったのです。

まずは'00年の慎吾ママ。まだ24歳くらいということもあって、細身に長身の香取は素敵なおてんばママ像にぴったりマッチ。「おっはー」「マヨチユチュ」にも違和感を感じず、まだまだイケると私は自信を持ちました。ちなみにサザエさんも同じ24歳。香取の幼稚さと、サザエさんの更年期ぶりのギャップたるや、どれだけ日本は変わってしまったんでしょうか。

そんなイケイケの私と香取に暗雲の兆しが訪れたのは、'04年のことでした。当時28歳。私はその2年くらい前から元カノの

家で無職の居候をしていたのですが、28歳になったとたん、元カノばかりか社会の見る目が急に冷たくなり「ぼちぼち仕事でも始めないとなあ」と思うに至りました。一方の香取は、「忍者ハットリくん」で世間のお茶を濁していました。まだまだ彼特有のコミカルなかわいらしさは健在なものの、どこか無理矢理な感じは否めませんでした。しかし、ちょうど30歳になる'06年にお互いの波が出始めます。「西遊記」で孫悟空を演じた香取は「なまか(仲間)の意」を流行らせようとして大コケし、私は私で渾身のぶりっ子キャラを演じて、キャパクラで冷たく笑われるようになってしまいました。きっとこの頃からキモモサが出てきたのでしょう。「見た目より若いですね」。この一言で一日がバラ色になるようになったのもこの頃です。不安の裏返しですね。

そして、'09年。慎吾兄さんは「こち亀」という高い波に挑みました。丸々とはち切

れんばかりの肉団子顔。おっさんがおっさんを演じた瞬間、すべては幻だったように私の目には映りました。おっさんはおっさんらしくないといけないう頃なのかな……。これまで兄さんの背中を追いながら「若さ」だけでサーフしてきたけれど、そろそろ浜に戻って、やり残した足下のことを整理しないといけないう。そう思った夏でした。

Takumi Kinoshita
フリーの編集者として「テレビブロス」など。茨城県つくば市出身。現在、表参道に在住。趣味は釣りと飛行機。海洋学者である父の転勤で13歳から17歳まで南太平洋の島国「フィジー」に住んでいたことから「フィジーさん」とも呼ばれる。高校の柔道部の友人が命名。

NEW WORK, NEW LIFE.

Cooperated by 東京仕事百貨

TOKYO DESIGN FLOWと東京仕事百貨が、読者のみなさんによりよく生きることと働くことが一致するような、意義ある仕事への入口をご紹介します。

東京仕事百貨

東京仕事百貨は、独断と偏見で仕事をセレクトし、酸いも甘いも紹介する新しいプロジェクト。生き方を探している人のための求人情報を提供し、新しい仕事の見つけかたを提案します。給与や待遇だけでは伝えられない仕事、東京仕事百貨にはたくさんあります。意義ある仕事を意欲ある人に届けます。http://shigoto100.com/

いきなり地域活性化ディレクター

株式会社 地域協働推進機構

地域活性化の仕事をした人は多い。しかし、どうやってやればいいのか？東京から程近い埼玉県鶴ヶ島市。ここでは「映像ディレクター」と「農業ディレクター」を募集している。映像ディレクターは、市役所や鶴ヶ島市市民活動推進センターなどで流れる映像を作るのが主な仕事。地域の取材をして撮影、編集まで一人で行うことが求められる。農業ディレクターは農業交流センターが主な舞台。仕事内容としては農産物のマーケティング調査及び販路拡大のための営業活動。さらに新しい農業ビジネスモデルをつくること。地域活性化や町おこし、ソーシャルビジネスに興味があるなら、絶好の機会だと思う。



【給与】
月給 18 ~ 40万円
【事業内容】
(映像ディレクター)
地域情報(文化資産、社会活動等)の取材及びビデオ撮影、編集業務
デジタルアーカイブの活用等、映像を通じた協働まちづくりの企画立案
(農業ディレクター)
鶴ヶ島市における農産物のマーケティング調査及び販路の拡大のための営業活動
農産物の生産を通じた農業ビジネスモデルの企画立案
【勤務地】
埼玉県鶴ヶ島市
【勤務時間】
9:00 ~ 18:00
休日は土日祝日、年間休日125日
【応募資格】
特になし。
【選考基準】
(映像ディレクター)
映像編集の経験があれば尚可
(農業ディレクター)
農業経験があれば尚可
【その他】
試用期間3ヶ月あり

さらなる詳細は東京仕事百貨へ。http://shigoto100.com/

シェアハウスのネサンス

株式会社ひつじンキュベーション・スクエア

最近シェアハウスに対する考え方が変わったことを実感している。今まではお金がないから仕方なくするものだったけれど、今は喜んでシェアハウスに住む人が増えているのだ。「現代日本のスラム」からまったく新しい「都市コミュニティ」へと変わってきている。シェアハウスを紹介しているひつじ不動産では、3つの仕事を募集している。シェア物件を取材する「物件探検隊員」、ひつじ不動産のウェブサイトをつくる「プログラマー」、そしてシェア住居に興味をもっているディベロッパーや不動産事業者などに対して、参入支援と促進を行う「新規事業ディレクター」です。



【勤務内容】
(物件探検隊員)シェア物件の取材等(撮影、画像補正作業含む)、各種コンテンツのライティング(プログラマー)ひつじ不動産サイト等の制作、データベース、ウェブサーバーの運用
Linux, MySQL, PHP※フレームワーク利用経験必須、アジャイル開発に興味のある方
(新規事業ディレクター)不動産事業者をターゲットとした各種施策の戦略立案、資料作成、営業等
【給与】
(物件探検隊員)月額20万円~
(プログラマー)半年間の試用期間中は月額25万円~。
以降は応相談。
(新規事業ディレクター)月額30万円~
【雇用形態】
正社員・契約社員・業務委託など応相談。
※能力があれば3ヶ月程度で雇用契約可。
【募集職種】
物件探検隊員、プログラマー、新規事業ディレクター
【勤務地】
東京都渋谷区桜丘町31-8 渋谷ビレッジ南平台3F
(渋谷駅から徒歩5分)
【勤務時間】
応相談、フレックス制
【応募資格】
社会人経験のある方
【選考基準】
「ひつじ不動産」そのものに対して情熱をもっている方
「ひつじ不動産」を、これからこうしたいという意思のある方。

さらなる詳細は東京仕事百貨へ。http://shigoto100.com/

おんぼろ礼賛

オリエンタル産業株式会社

古い住宅も大切にしたい。そして日本の街並みまで変えることができれば。そんな思いから生まれた不動産屋さんがある。その名も「おんぼろ不動産マーケット」。「えっ、おんぼろ……!？」と驚く人が多いかもしれない。けれどただの目立ちたがり屋ではない。住む人が「おんぼろ」のまま買って、自分の好きなようにリノベーションすれば無駄がないのに、という思いから生まれた不動産屋だ。もしあなたが不動産の仕事をしていて、なんだか自分が売りたいものを売っていない、と考えているならば。もしかするとここには売りたいものがあるかもしれない。



【事業内容】
物件情報の収集から調査・取材・サイトの作成、そしてお客様の案内、オーナーとの交渉、そして書類作成、契約のとりまとめまで、「仲介」に関わる全ての業務。オンポ物件がお客様の好みの部屋になるかどうかの見極めが重要な業務となります。世界に2つない部屋づくりのお手伝いをしてあげてください。
【給与】
当社規定による固定給+実績給(詳細はご相談下さい。)
※試用期間3ヶ月は固定給。
【雇用形態】
正社員・契約社員でも構いません。お互いがハッピーになる形態を考えましょう。
【募集職種】
不動産仲介営業
【勤務地】
神奈川県川崎市高津区下作延101
(東急田園都市線「溝の口」駅から徒歩7分)
【勤務時間】
8:00 ~ 17:00(休憩1H)
水曜定休、GW、夏季、年末年始、慶弔休暇、有給。ユニークな就業規則もあります。例えば、本人、そして同居の夫、妻、子の誕生日は休暇となります。結婚休暇より長い、離婚休暇やベネッセ休暇制度もあります。
【応募資格】
宅建士、営業経験者のみ
【選考基準】
日本で本格的に住宅の中古市場を作って、社会に貢献したいと考えている方、コミュニケーション能力の高い方、アイデアを実行するパワーがある方、モチベーションの高い方、将来独立したいと考えている方

さらなる詳細は東京仕事百貨へ。http://shigoto100.com/

都市に農的生活のタネをまく - 未来の仕事の形。

メディアサーフコミュニケーションズ株式会社

Farmer's Market@GYRE
Farmer's Market@UNU

「culture(文化)」の語源は「cultivate(耕作する)」にあります。耕すこと、すなわち「農」という自然との関わりを忘れては、文化も不毛なものになるばかりです。我々は「都市にクリエイティブでサステナブルな新しい生活文化をつくる」べく、昨年11月から毎月、表参道GYREにてFarmer's Marketを行ってきました。Farmer's Marketとは、生産者と消費者がつながる場所、人とモノと新しいアイデアが出会う場所です。未来の日本の農業と働き方に新しい形を提案します。今年の9月頭からは、青山通りにある「国連大学前」という場所も使って毎週末Farmer's Marketを開催することになりました。それに伴い、新しい仲間を募集中です。一緒に新しい仕事を創りましょう!

【業務内容】
Farmer's Marketの企画/運営及びプロモーション編集にかかわるすべて。
【契約】
1. 正社員(パートナー)
2. 契約スタッフ(アソシエイト)
3. 時間給アルバイト(サポーター)
【勤務地】
HID世田谷ものづくり学校 / GYRE / 国連大学
【給与】
相談のうえ決定
1. 正社員 月給22万以上(社保、年金完備)
2. 日給・週給等。
3. 時給800円以上
【選考基準】
農や食に関心があり、「新規事業をつくる」という困難な仕事を楽しめる姿勢と創造的な意欲を持っている人を求めています。
【その他】
Farmer's Marketの企画/運営、及び農的生活をテーマにしたフリーペーパー、雑誌の編集などを通して、どんどん新しい仕事や企画を生み出していきたいと考えています。自己責任をとって、自分なりのアイデアがあり、事業組み立てに関心のある人はぜひお問い合わせください!
【問い合わせ先】
farmersmarket@mediasurf.co.jp (田中)

新たな価値観を提示する。

メディアサーフコミュニケーションズ株式会社

MEDIA SURF COMMUNICATIONSが一言で定義されることはありません。いろいろな企業とコラボレーションを行うクライアントワーク、原宿という街や若い人たちが作り上げてきたカルチャーにリスペクトを示すために「TOKYO DESIGN FLOW」という有機的で、捉えどころのない流れを創りつづけています。取って代わられるような、情熱的な才能を求めています。



【業務内容】
1. TOKYO DESIGN FLOWの企画、運営
2. MEDIA SURF COMMUNICATIONS 周辺のお仕事
【契約】
1.2. まずはインターン
【勤務地】
HID世田谷ものづくり学校
【給与】交通費のみ支給(詳細は相談の上、決定)
3ヶ月ごとの契約形態の見直しがあります。
インターンからアソシエイト(時給制)、アソシエイトからパートナー(給与制)といったステップアップが考えられます。
【選考基準】
情熱をもって仕事に取り組める方。
作業としての仕事でなく、何か新たな仕事を自身で率先して探して、やり抜ける方を求めています。
【問い合わせ先】
info@tokyodesignflow.com (松井)
【その他】
メディアサーフコミュニケーションズ株式会社
www.mediasurf.co.jp
TOKYO DESIGN FLOW
www.tokyodesignflow.com

新しい建築の働き方

株式会社 シームレス

同年代の30歳前後で建築を志している人たちはみな大変そうだ。みんなこのままでいいのだろうか……と考えているけど、それじゃどうしたらいいの? というのが正直なところだと思う。SEAMLESSは新しい建築の働き方を教えてくれる会社かもしれない。端的に言えば設計から施工、それに家具の製造・販売までワンストップで対応している。今回募集しているのは、①工事が分かる人と、②家具をインターネットで販売するためにゼロから企画・運営できる人。今までの狭義の「建築」にとらわれる必要はないと思う。仕事はSEAMLESSに、もっとクリエイティブに。



【勤務地】
東京都渋谷区神宮前1-1-1 原宿駅徒歩5分
さらなる詳細は東京仕事百貨へ。http://shigoto100.com/

TOKYO DESIGN FLOW SUPPORTER'S LIST

下記店舗にてTOKYO DESIGN FLOW paperを入手できます。

- | | | | |
|--|---|---|--|
| <p>■表参道・原宿エリア
HIDEAWAY/SMOKE BAR
&GRILL/Sunshine Studio/
HIDEAWAY/Café Studio/
MILK café/LoiteR/
Ucces the lounge/WIRED
CAFE 360°/ Burton/
GRAVIS/55DSL TOKYO/
DEPT/K-SWISS/inhabitant/
UNDFTD/STUSSY Harajuku
Chapt/AIGLE/The North Face/
EASTPAK/Lafuma/
TOKYO HIPSTERS CLUB/
MIZUNO/QUIKSILVER
Flagship Store 原宿/element/
kinetics/atmos/X-LARGE/
VA/SOPH./BLISTER/</p> | <p>Rocker & Hooker/GALLERY
SOCIAL/FREAKS STORE/
Manhattan Portage TOKYO/
GREGORY Tokyo Store/
ADIDAS ORIGINALS SHOP
HARAJUKU/CARNIVAL/
FIG BIKE/W-BASE</p> <p>■外苑前エリア
GORO'S DINER
ストアcafe
Sign gaienmae
OFFICE/PROTECH</p> <p>■青山エリア
briftH
Chambres D'hotels HANA</p> | <p>■渋谷エリア
SPBS/SLOW JAM
SEXON SUPER PEACE
HMV渋谷</p> <p>■代官山/中目黒エリア
Sign daikanyama/STITCH
TOKYO/styles代官山/
FRAMES/UNIT/ FIG BIKE/ ゆ
かや/combine books & foods/
PEDALED / GAZEBO</p> <p>■六本木エリア
SuperDeluxe</p> | <p>■三宿エリア
ナリワイ 下馬土間の家
H TOKYO
IID世田谷ものづくり学校
三宿Web</p> <p>■代田橋エリア
Chubby</p> <p>■五反田エリア
GOTANDA SONIC</p> <p>■浜田山エリア
狸サイクル</p> <p>■下北沢エリア
気流舎</p> |
|--|---|---|--|

SUPPORTER'S NEWS

BACARDI Mojito Loves FUTABA FRUITS @ Cafe LAGUNAVEIL 705

心地よい風のそよぐ、南青山にある都会のオアシスCafe LAGUNAVEIL 705で世界最大のラムブランドBACARDI社の協賛の元、現在、人気急上昇中のラムベースカクテルMojito(モヒート)とフタバフルーツがコラボレート!爽やかなミントテイストのモヒートベースにお好みのフルーツをトッピング!あなただけのオリジナル・モヒートを楽しんでみませんか?アコースティックのライブパフォーマンスなど内容も充実!この機会をお見逃しなく!

日時:2009年9月10日(木)19:00- (フルーツタイム19:00-22:00)
会費:¥2,000 (with 1 モヒート)
会場:Cafe LAGUNAVEIL 705
住所:東京都港区南青山4-21-26 RUELLE青山1F
アクセス:地下鉄線有楽町線参道駅 徒歩3分
地下鉄半蔵門線表参道駅 徒歩3分
主催:Cafe LAGUNAVEIL 705
協賛:BACARDI JAPAN、フタバフルーツ
問合せ:info@futaba-fruits.jp



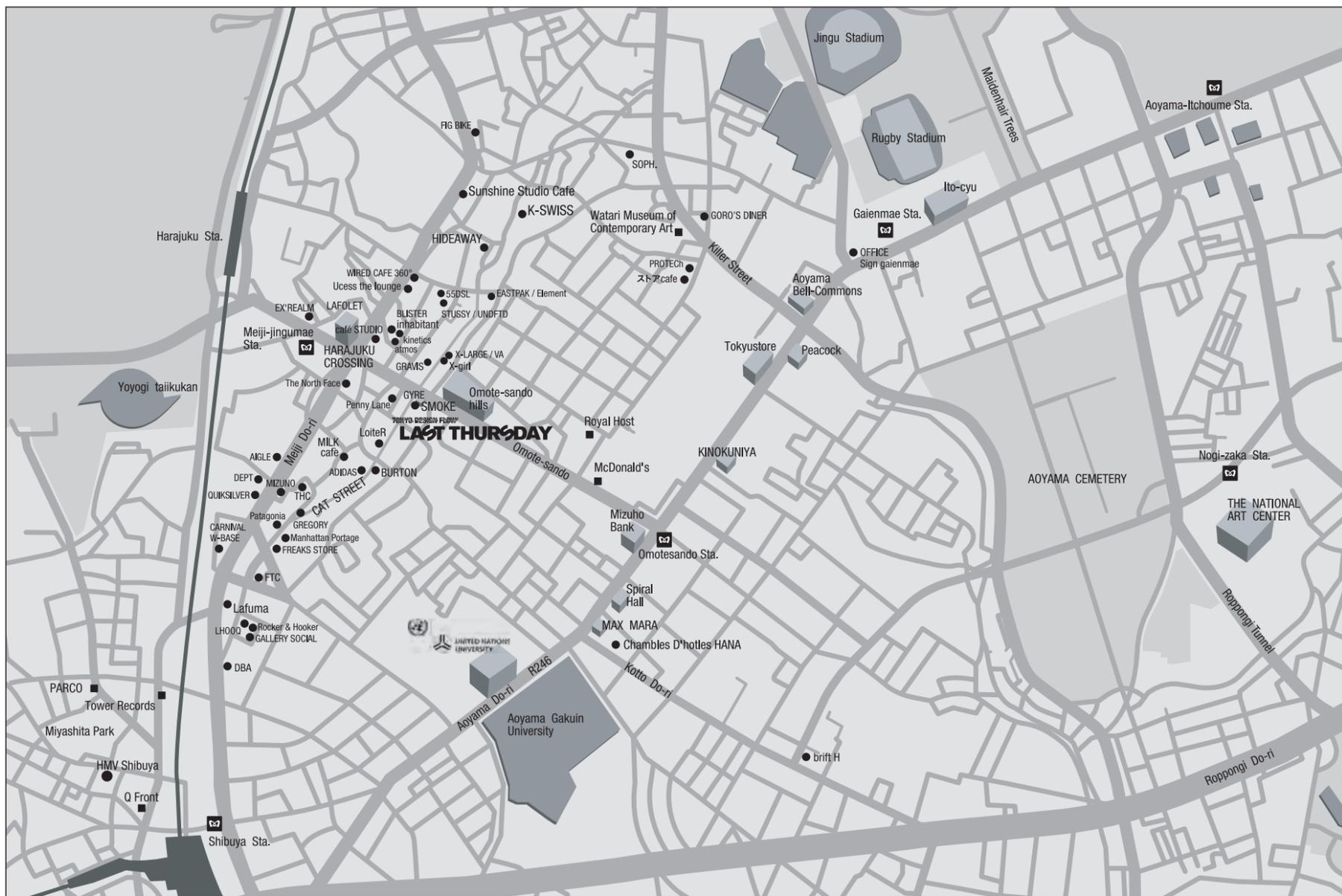
Remake Bike Workshop 開催

先月NYから来日したアーティスト集団「Black Label」により急遽開催された「Tall Bike Workshop」。今度はR自転車集団主催で開催します。Tall Bike (2階建て自転車)の他にも自転車のフレームを使ったチェアなども制作。



前回のTall Bike Workshopの様子

日時:2009年9月22日(火・祝日)
定員:Tall Bike 制作3名 / Bike Chair 制作3名 参加費:¥5,000
会場:IID世田谷ものづくり学校1F R自転車集団
*Tall Bikeを制作希望の方はペースの自転車1台+フレーム持参をお願いします。
自転車をお持ちでない方は1台3000円程度で中古車購入可。
*お問合せ:03-6805-4920 / rbike@splash.dti.ne.jp (R自転車集団)



●: TOKYO DESIGN FLOW paper 設置店舗

配布店舗募集 我々の考え方に共感し、「TOKYO DESIGN FLOW paper」を応援して下さる店舗様を募集中です。興味のある方はinfo@tokyodesignflow.comまでお問い合わせください。

ネット販売 雑誌のオンライン書店「Fujisan.co.jp」にて「TOKYO DESIGN FLOW paper」をお買い求め頂けます。http://www.fujisan.co.jp/magazine/1281683108

定期購読のお申し込み 定期購読をお申し込みいただけます。info@tokyodesignflow.comに「定期購読」と件名に記入し、お名前、住所、電話番号、部数をご記入の上、お申し込みください。



Schooling-Pad

デザインを知り、
クリエイティブリーダーシップを育む

**Not just knowledge.
Access to wisdom.**

デザインコミュニケーション学部9期生募集中!
www.schooling-pad.jp



AFTER WORDS

お気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、何を隠そうTOKYO DESIGN FLOWを運営している僕たちの会社はメディアサーフコミュニケーションズ株式会社(Media Surf Communications Inc.)といます。ショートボードの出現によって、より自由に3次元的に波の乗ることが可能になったサーフィンのように、縦横無尽にメディアをサーフして表現をしていこうというところからのネーミングです(誰もこれに触れなかったのでここでフォローしておきます)。そんな僕らが今回のテーマに選んだのは「SURFING & FARMING」。そんなこんなで千葉まで取材に行ってきました。早朝に東京を出て、朝8時には一宮の海。太陽に照らされて光る水面が印象的でした。そんななか考えたのは「振れ幅」ということについて。都市のなかでハイブリッドな生活をしていても、サーフィンや何かで自然も身近にある。夜遊びもするけど、早起きして農作業も悪くない。そんな振れ幅を持つことが大切なんじゃないかと。右に左に大きく動けば動くほど多くのものを受け入れられる。だからこそ意外と安定している。昔、僕が世界で一番尊敬している人が言っていました。「所謂安定は求めてないけど、常に変わり続けている、っていう安定は求めてるよ」。なんとなく感動したけど、やっと本当の意味が少しわかってきたような気がしています。

編集長 堀江大祐

LAST THURSDAY

7.30 2009 REPORT

Traveling Night.

text: TOKYO DESIGN FLOW Photo: Nobuya Aqune, Momoko Matsuki

今回のLast Thursdayのテーマは当日に配布開始となった「TOKYO DESIGN FLOW paper N13」と同じく「旅」。ということで、旅人、そしてフォトグラファー、さらに「No Travel, No Life」(A-Works, 2008年)の著者である須田誠氏のトークショーからスタート。旅中に起きたミャンマーでの皆既日食やタイでの詐欺師の話など様々な出来事を写真とともに話してくれた。オーディエンスはリラックスしながらも、時に真剣に、時に笑いを交えた須田氏ならではの話に聞き入っていた。外のテラスでは山尾光平(BAKIBAKI)氏、そしてNOVOL氏によるLive Paint。2人で1枚のキャンパス上に描いたのは、亡くなくても、なお話題の中心にいるマイケル・ジャクソン! 若かりし頃のMJと、最近のMJの顔が表れ、完成後は撮影会がおわらないほどの大好評だった。そして今回は2人組のアーティスト、YUKI & DJ SHIBAのバイオリンとDJのコラボレーションが登場。クラシックミュージックのイメージが強いバイオリンだが、DJの出す音楽に合わせてHIP HOPやR&Bをすてきな音色で聞かせてくれた。その後の会場を盛り上げてくれたのはDJ Nal、そして大貫憲章氏は今回もLast Thursdayの最後を飾ってくれた。同時開催のNight Pedal Cruisingは途中雨に見舞われたが、初の海を目指してのクルージングは大盛況。夏の夜風はとても気持ちがよかったようだ。



NEXT LAST THURSDAY >>> 9.24 2009

SENSE × 岡部修三 (upsetters architects) @ SUMMER SONIC 09

「夏の定番」といえば、フェス! 今年のSUMMER SONIC 09の東京/大阪会場でのモニュメントをデザイン/制作した、senseくんと岡部修三さんに、コンセプトや制作過程について話を聞いてきました!

interview&text: MAT. (media surf)



MAT. (以下、M): 今回は具体的にどんなモニュメントを作られたんですか?
岡部修三 (以下、O): 東京はエントランスのゲート、大阪は休憩スペースですね。ミッドタウンさんとかでもsenseくんはオブジェのデザイン/制作はして今回の大阪は基本的には同じ考え方なのですが、全く新しいものを作ろうと思いました。
sense (以下、S): 「書き下ろし」、みたいな感じで。その空間で来た人たちが気持ちよく過ごすことができるか、ということも考えながら。
O: senseくんの頭のなかでは、ラインを描いているときに立体がイメージされていると思うから、それを現実にしつつ、senseくんの言う気持ちよく過ごすってことをどれだけ飛躍させられるかが勝負だと思ってました。後は、サマソニが今年で10周年だっ

たんでそれを祝うようなものにしよう、と。
M: スゴい複雑なバルーンの形ですね(笑)。
O: そうなんですよね。バルーンの工場の人たちも「こんなのは、初めてです」と言っていました(笑)。で、あきらめて似たカタチを作るっていうのもありかもしれないんですけど、妥協してそうした瞬間にすべて終わってしまうと思うんですよね。CGを工場に持ち込んで再現していく地道な作業でした。
M: お客様の反応はどうでしたか?
O: 一度エントランスを通過して、振り返って、戻ってきて写真撮る、みたいな人たちがいたのはうれしかったですね。あと、外国人のお客様たちはそこで遊んだりしていて、かなりダイレクトにリアクションしていました。
S: 最初にしたコンセプト通りにみんな遊んでくれたね。その点ではモノとしても成り立ったかな、と。
M: やり終わってみてどうでした?
S: 今年は初めてでわからないことも多かったから、その反省をしつつ、ただ、心の



中に余韻みたいなものはじわじわ持ち続けているんだけどね。

M: 今後お二人でまた何かされたりは?
O: 自然にやることになって、成立させるためのベクトルがあるものがあれば、という感じですね。
S: やっぱりヴァイブスがあうから、あとは方向性と目的地が一緒なら自然とやることになるよね(笑)。

坂巻善徳 a.k.a. sense
1971年12月生まれ。美術家、音楽家、有限会社senseeds代表。スノーボードライダー、トラックメーカー、バンドキタリストなどを経て2002年の初個展から美術家としての活動を開始。美術作家、ライブペインターとしての活動を軸に、広告、店舗内壁画、イラストレーション、クロージングデザイン、CDジャケット、プロダクトアートディレクションなど、様々な分野で多数の作品を世界に送り出し続けている。

岡部修三
(建築家) / Shuzo Okabe (architect)
2004年より「upsetters architects」主宰。「都市を観察し風景を再構築する」をコンセプトに、建築、インテリア、イベントなど、都市のアクティビティに関わることを全般をデザイン対象として、分野を横断して活動を続ける。JCDデザイン賞金賞、グッドデザイン賞など受賞歴多数。
www.upsetters.jp

PROJECT × AlexanderLeeChang

interview&text: MAT. (media surf)

リサイクル・セレクトショップRAGTAGによるリメイク・プロジェクト。それが「PROJECT」(アール・プロジェクト)。これまで世界の貧困地域にボランティア団体を通じて古着の寄付を行ってきたRAGTAG。しかし、受け取り側の事情により寄付を受け付けられなかったものもあったそう。そうした古着に再び生命を吹き込むプロジェクトだ。その第1弾商品をデザインしたのが本誌でも連載中のアレキサンダー・リー・チャン!

「今回のプロジェクトに参加した理由は、僕に声をかけてくれた人物の存在が大きいです。救援物資として送ることができない、ただ廃棄になってしまう、消えかけた命にもう一度灯を灯そう! って、良くある

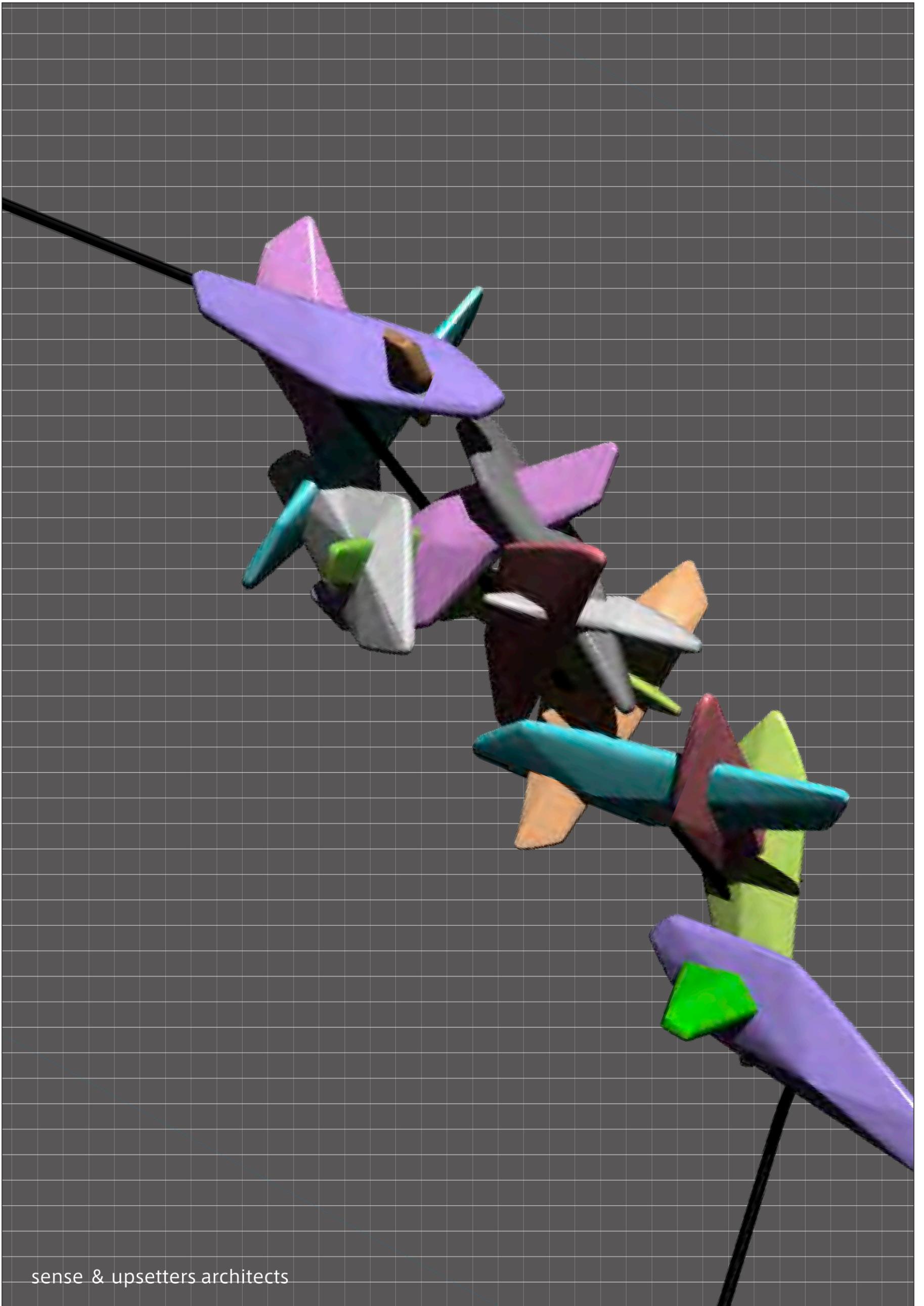
ことだと思うんだけどね。リメイクをすることって、アイテムにお化粧してあげることだと思う。不細工なところ、不格好な部分があって、そこを生かすのが化粧。不完全だからこそ、きれいなんだと思う。」(アレキサンダー・リー・チャンさん)

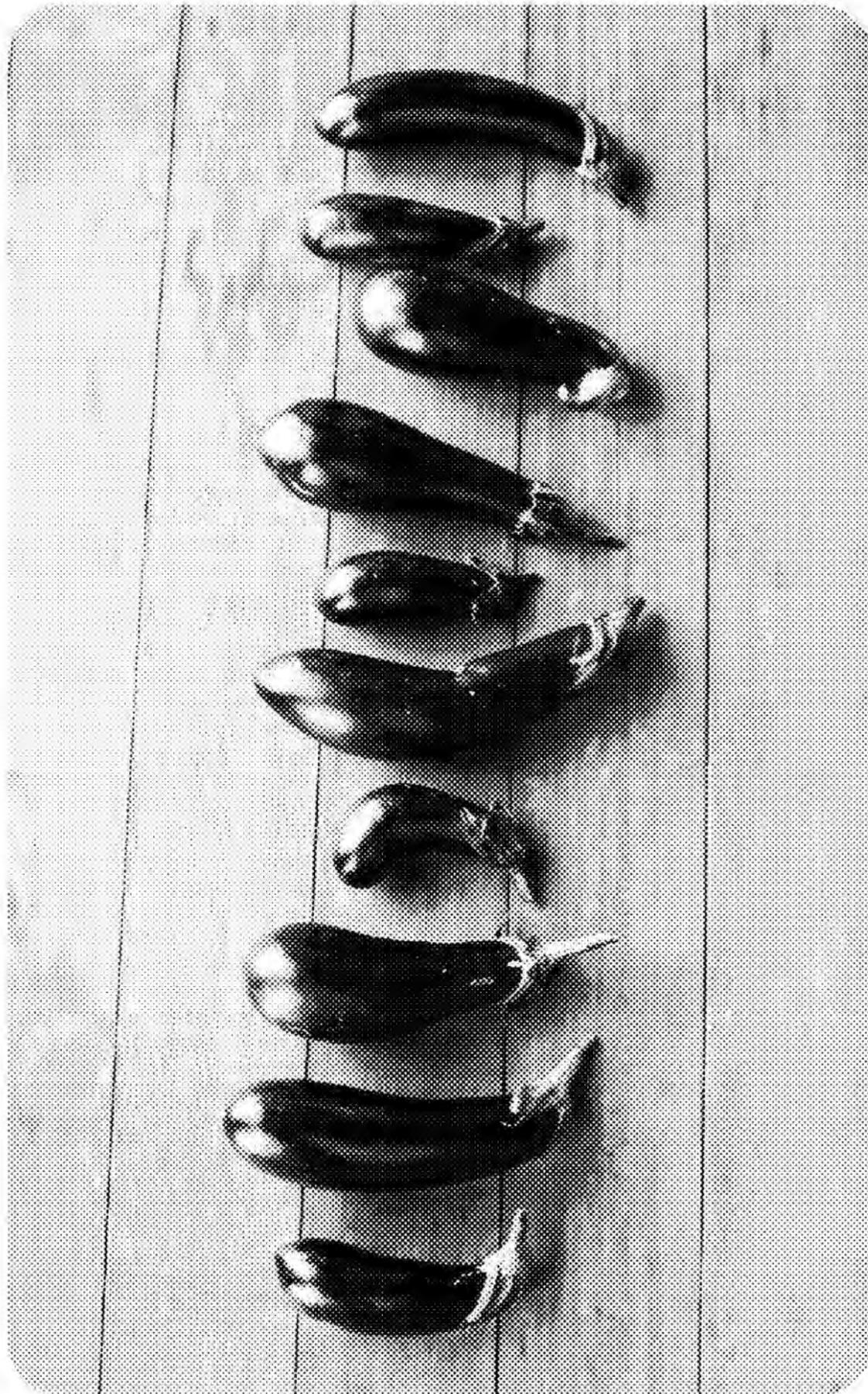
販売はRAGTAG渋谷店 2F ロフト、特設ウェブサイト(www.r-pjt.com)で9月30日(水)まで。

プロジェクトに関するお問い合わせ
株式会社ティンパンアレイ
TEL 03-5568-7110 (http://www.r-pjt.com/)

アレキサンダー・リー・チャン
1975年サンフランシスコ生まれ。7年間のアパレルブランドディレクター経験を生かし03年に自身のブランドAlexanderLeeChangを掲げ独立。プロスケーターとしても10代から活躍しており、自由発想と結果に結びつける行動力を武器に縦横無尽に創作活動を続けている。
www.alexanderleechang.com







FARMING & SURFING

**Farming. Cultivating the soil.
Playing with surface of the earth.**

MONTHLY EVENT TOKYO DESIGN FLOW

LAST THURSDAY

ART, FASHION, FOOD, TRAVEL, SPORTS, MUSIC and DESIGN.

www.tokyodesignflow.com